

北伊予の伝承

第11集



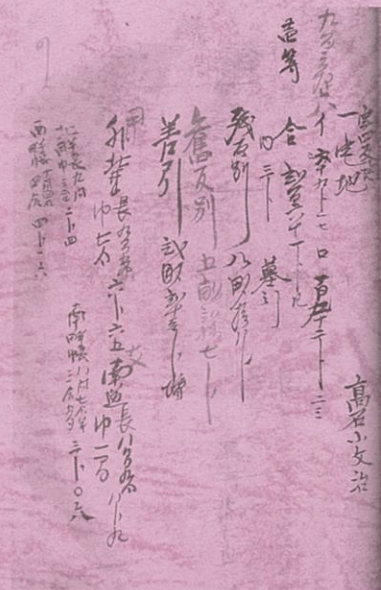
松前町東公民館



(出征兵士と家族)

「Ⅰ 記憶でたどる北伊予の暮らし」では、戦前から高度経済成長期までの「衣食住」を中心とした「北伊予の暮らし」に焦点をあて、各地区から選出された高齢者の皆さまに記憶をたどって頂きました。

何といっても戦後の生活苦―食料不足―との戦いです。カーキ色の国民服やモンペ、ひもじかったあの頃、菌を食いしほり明るい未来を信じて生きてきたのです。



(畝順帳の内容)

「Ⅱ 北伊予の小字ホノギ」では、北伊予地区の小字（ホノギ）をまとめました。明治一五年に地名調査が行われ、『段別畝順帳』（野取図）に記載されている小字が愛媛県に報告されました。

今回、不十分ですが、小字の由来や伝承を調べ、その位置を地図上に示しました。田一筆毎に和紙に墨で書かれた『段別畝順帳』は貴重な資料として各地区に大切に保存されています。

発刊にあたって

現代における人々の暮らしは、生活環境の変化や核家族化の進展に伴い大きく変化し、伝統的な地域文化が失われつつあります。

そこで、今回の第一集では、激動の昭和を生き抜いてきた人々の高度成長期以前の「暮らしと生活・文化」に焦点をあて、これら貴重な伝統的文化を後世に残していくため、各地区から高齢者の方々に集まって頂き、座談会を通してその原風景を聞き書きしました。

また、北伊予校区の小字（ホノギ）は、北伊予の歴史を知るうえで、欠かすことは出来ません。この第一集では、小字の位置を地図に示すとともに、その地区の起源や由来、特色ある伝承等をまとめてみました。

本誌が少しでも北伊予校区の皆さまのお役に立てれば幸いに存じます。

最後に、本誌の発刊にあたり、献身的なご尽力を賜りました編集委員の方々、座談会にご出席して頂き、大変貴重な体験をお話し頂きました皆さま方に心から厚く御礼申し上げます。

平成二四年三月

松前町東公民館長 得能 廣明

目次

I 記憶でたどる北伊予のくらし

- 一 「装い」について 2
- 二 「食」について 13
- 三 「住まい」について 22

II 北伊予の小字（ホノギ）

- 一 徳丸の小字（ホノギ） 34
- 二 中川原の小字（ホノギ） 37
- 三 出作の小字（ホノギ） 40
- 四 神崎の小字（ホノギ） 43
- 五 鶴吉の小字（ホノギ） 47
- 六 横田の小字（ホノギ） 50
- 七 大溝の小字（ホノギ） 53
- 八 永田の小字（ホノギ） 56
- 九 東古泉の小字（ホノギ） 59

I 記憶でたどる北伊予のくらし

長い伝統を受け継ぎ、激動の昭和を生き抜いた北伊予の人たちの高度成長期以前の「くらしと生活・文化」に焦点をあて、各地区から選出された貴重な経験の持ち主である高齢者の方々の座談会を開催しました。

高度成長期以降、生活環境の変化や核家族化の進行など、社会の変化に伴い人々のくらしや生活・文化が大きく変化した、伝統的な地域のくらしや文化が失われつつある現在、かつての「北伊予のくらし」を振り返り、原風景を記録し残すことを目的として企画しました。

盛夏の七月二十六日の午前、一四名（男性七名、女性七名）にお集まりいただき「装い」、「食」、「住まい」の三分野に分かれ、東公民館で貴重なお話を伺いました。それをまとめたものが、この「記憶でたどる北伊予のくらし」です。

座談会に出席された方々は

八東兼福（徳丸）、本田智・合田テルコ（中川原）、神野典子（出作）、水口義一・合田ミユキ（神崎） 瀧川裕・相原隆志（鶴吉）、徳本カナエ・町田京子（横田）、栗原キミコ（大溝）、中村文雄（永田）、早瀬辰郎・森下富子（東古泉）の皆さまです。

なお、今回お聞きできなかった「北伊予の生業・交通・教育・生活文化」など、衣食住以外の項目については、後年座談会を実施したいと考えています。



後列左から 徳本 神野 合田（テ） 八東 相原 森下 町田
前列左から 瀧川 水口 本田 中村 早瀬 合田（ミ） 栗原

座談会に出席された方々
・日時 平成二三年七月二十六日 午前九時より一二時まで
・場所 松前町東公民館

一「装い」について

出席者の皆さん

鶴 吉 濱川 裕 (大正一二年生)
 東古泉 森下 富子 (大正一四年生)
 神 崎 合田ミユキ (昭和三年生)
 徳 丸 八束 兼福 (昭和四年生)



座談会出席者の皆さん



座談会スナップ

本日は大変ご多用のところお集まり頂きありがとうございます。激動の昭和を生き抜いた皆さまに、戦中・戦後から高度経済成長期以前の北伊予の「装い」についてお話を伺いたいと思います。

その内容を大きく三つに分けました。最初は、「普段の日の装い」について、続いて特別な日、いわゆる「ハレの日の装い」について、最後に「戦中・戦後から高度成長期までの装い」といたしました。

—まず最初に、「普段の日の装い」、中でも普段着や作業着について伺いたいと思います。



森下 戦時中、普段着は着物を仕立て直してモンペにしてはきました。よそ行きで出かける時には少しよい品物で、二部式(甲型—洋服式でベルト付きの上着、紐付きのモンペ。乙型—和服を上下に分けたもの)にしました。

女は普段、白地のエプロンを着物や洋服の上に羽織り、外に出るときには「会服」という紺の上着を着ました。その「会服」は確か昭和三〇年代から五〇年代頃まで、婦人会の寄り合いや学校の参観日や外出にも重宝しました。



合田 伊予紵の浴衣を解いてそれをモンペとか上着に仕立て直しました。物不足のための衣料の再製が盛んになり古着を再利用するのが普通でした。昔、普段着は男女とも簡袖の木綿の着物(スフ)んどでしたが、昭和一〇年ころから化繊(スフ)が出回るようになって、女の普段着も「簡単服」が流行しました。

男の冬の普段着は木綿の衿とデレンチ(防寒用に着

用する綿入れの袖なし羽織）や綿入りのドテラ（丹前）だったと思います。

―男の人はどうでしたか。



八束 男は別に再製品でなく、新しいのが古なつたんを順々に作業着におろしよったように思います。仕事着は戦後しばらく着物でしたが、だんだん着古した服がほとんどで、男は股引きと木綿のシャツ、冬はデんチを着ていました。女はよく

覚えていませんが、着物にモンペをはき、前垂れを付け、手拭を被り、冬は綿入りのハンテン（紐のないうわっぱり）を着て防空頭巾（布で作って頭に被る袋の形のもの）を被っていたと思います。

滝川 戦前・戦中は、男はゲートル（巻き脚絆）も巻いていて、いわゆる戦時色かなあ。

合田 そうそうカーキ色（黄色と茶色の混じったような、くすんだ枯葉色。旧陸軍の軍服に用いられたので国防色といわれた）の服だった。

滝川 それなりに緊張を込めた服装であつたように思います。いわゆる戦時色が込められた……。

八束 小学校卒業したのは、昭和一八年三月です。一年生頃から卒業するくらいまではほとんど黒の折襟でした。たまに着物を着てくる子がいたと思つたら医者通いしよる子で。ほとんど卒業する頃までいわゆる黒服です。戦争が激しくなつてからは、履物はチリ草履で通しました。靴がなかったんです。

―それまで履物はなんだったんですか。

八束 昭和一五年くらいまでは、なんとかズツクのような

靴がありました。それからほとんどチリ草履、学校の上履きもチリ草履でした。

滝川 あの頃ズツクといえば、スフが流行りよつたんよ。



とにかく耐久力がないボロ靴じやつた。生地がボロい。衣料品もとにかく粗悪品じやつたな。洗濯したら溶けるなんか言よつた。（笑い）

八束 夏服は、なんというか、ちよつと霜降りがかつたものじやつた。レーヨン（人絹）のはじまりで。繊維が粗悪じやつたから破れよい感じがした。

―特に作業着として買うんじやなくて、結局着古した物を作業着に回す、いわゆる田行きにするんですか。

八束・合田 そうそう、そうです。

滝川 お袋さんが、ほうぼう修繕しもつてやつていました。―女の方はどうですか。どんな作業着だったでしょうか。

森下 生地を買うというのがあまりないから、もう在るもので。物不足のため衣料品の再製が盛んになつて古着を再利用するのが普通になりました。新しい生地などは手に入らず、父の着古した背広や母の着物をほどこいてワンピースに、ブラウスもモンペに作り替えて着たものです。

滝川 昔の生地の方が丈夫であつたな。スフが混じつとりやせず。

森下 そうですなあ。

―昔は再製品や洗い張りなどがすごくあつたように思いますか。

森下 今みたいにクリーニングに出すんでもなし。

合田 自分の家で浴衣とか、銘仙をほどこいて、それで再製しよりました。何もかも母親の手作りでした。



再製した服を着る若い女性

もともと田舎では、着物や布団は自宅で洗濯して仕立てるのが普通でした。夏の農閑期に着物と布団をほどこき、木綿は板張り（洗濯板に糊を付けた布を貼りつけて乾燥させる）、絹物は伸子張り（洗った

布のしわを伸ばし、ピンと張らす両端に針のついた竹製の串・ひご）の方法で洗い張り（縫い直し）をしていました。

森下 よいものは伸子張り、木綿は板張りじゃったな。今頃みたいに糊がないからご飯を漉してやってました。

―再製衣料といえ、昔分厚い生地ホームパンがありましたね。

滝川 支那米袋？（笑い）思い出しました。終戦後にそれのオーバーを買ったことがある。

―麻で出来てるんですか。

滝川 いいや麻ではない木の皮よ。木の皮なんかで繊維採って作っとりましたわい。

八束 ホームスパンのオーバーを自分らも着ました。

―話が変わりますが、戦前・戦後の一時期、ほとんどの家では伊予紬の賃織りをしていましたね。

滝川 紺屋（紺屋）いうのが中川原に大部あったな。私、遠足かなんかで中川原に行くのに紺（糸）を掛けとったけん直ぐ分つた。

藤田（記録） 私とこが、その紺屋じゃったんです。紺屋と

か精米・製粉を親父がしよりました。

滝川 おいおい時代とともになくなつたなあ。

八束 私方も母が長らく伊予紬を織りましたが、材料の糸は松山の今出（います）から来よつたかな。各家で織つた布と糸を交換するんです。一日に一反（着物一着分）織るのは骨が折れたようですよ。

―これは賃織りの内職をして

たんですか。

合田 そうです。女の内職ですね。どの家からも一日中、機を織る音がしていました。その頃は女は外で働く場も少なく唯一の楽しみであつたと思います。

―いつ頃までしてたんでしょうか。

森下 昭和三〇年代には、もうなかったですね。それまでは、ほとんどの家には機械機と手機がありました。

八束 だいたい戦時中くらいかな。ほとんどの家で機音がしていた。

滝川 もう戦時中か、戦後間もなくなくなった。

―次に二つ目の「特別な日の装い」について伺いたいと思います。その中でお正月やお祭り、結婚の装いなど「ハレの日」の装いについてお願いします。

滝川 男の子どもは別にお祭りじゃと言うて特に変わった



伸子張り

ことはなかった。大人はそれはいろいろありましたが……。

八束 お正月じゃったら着物姿でしたな。

合田 普段は浴衣とか木綿のモンペを着ていました。お正月とかお祭りは、ちよつと上等の銘仙か何かで、モンペの上下を作つて着とりましたね。

―結婚の衣装も再製品だったんですか。

瀧川 戦争中モンペが流行りだしてからでも、晴れ着もモンペじゃったと思う。女子の衣装は全然分からん。

八束 結婚式でも、モンペと国民服でしよつたのを見たことがあります。

瀧川 結婚式でもモンペでしよつたんかな？

八束・合田 はいそうです。

―その結婚式の衣装について教えてください。

瀧川 私は和服の羽織袴はおりはかまで、家内はがいよに髪結うてもろてなあ、ええ着物着せてもろうて二人で写真撮つたのがあります。

―式は家でされたんですか。

瀧川 ええーもちろん家です。昭和二四年でした。

八束 私が結婚したのが昭和二九年です。丁度景気が大分よくなつて花嫁の道具がおいおい華美になつて……。

どなたが婦人会長だったか知らんですけど、結婚改善・生



国民服での結婚式

活改善いう声があがつて間筆筒けんたんす（長さが一間いっけん約一・八はちの和筆筒）は、いかんぞと言われたんです。たまたま私が青年団に関係があつたもんですから「お前が皮切りをせい。」と。

―間筆筒というのは一間の筆筒ですか。

八束 はい、そうです。二九年頃聞いたことあるでしょう。当時の嫁入り道具は整理筆筒と布団ふだん櫃ひつくらいでした。洋（洋服筆筒）は、いかんということ、持つてきよつたら「石投げちやる」じゃの言うような笑い話まであつたですが……。結局、間筆筒を後で買わないかんようになって覚えとりました。そんな訳で間筆筒は持つてこなんだことを覚えてきます。それが、私等を境にして、だんだんと華美になつてきたと思います。

―その時、奥様の衣装は。

八束 はい。やつぱり和服で文金高島田ぶんきんたかしまだです。

―もう少し生活改善のお話を伺いたいのですが。

八束 その当時、結婚や他のものも華美になるので、それを戒める意味で、結婚改善が主眼じゃつたようです。

合田 私は昭和二四年に結婚しました。美容師さんに前の日から髪を結うて頂き、当日も朝から支度してハイヤーで徳丸から神崎へ来ました。ハイヤーに乗るのは後にも先にも一生の間に初めて終わりじゃなと思ひました。そういう時代でした。

森下 私は自宅で二一年の九月二〇日じゃつたんですよ。私は村（東古泉）から同じ村へ。花嫁だけは歩けんから人力車に乗つてお嫁入りです。その頃はもう自分の髪では結わなくなつてカツラでした。

―戦後間もない二一年は特に物不足の時でしたね。

森下 着るものは買うこともできんから、私のいとこの嫁が一〇年くらい前に嫁いできたときの衣装を借りて着ました。

―話は変わりますが、お母さんは暗い電灯の下で夜なべをしてましたか。

森下 はい。下着や足袋は、綿の布地やから直ぐ破れるんですよ。ほしたら、夜は母親がいつも夜なべで繕い物をしていました。

合田 母は暗い灯りの下で毎晩夜なべをしていました。一つの灯りの下に家族が集まって夜を過ごしてました。

瀧川 一〇燭（灯火）の暗い電球の下で、何人も子どもが勉強し、お母さんは繕い物をしとった。

森下 そうですなあ。

瀧川 電球よな、一つしかない家もだいぶあつたぞな。お父さんは新聞を読む。あの暗い中で、よう見えたもんじやと思います。

森下 そうですな。あの頃一〇燭とか一六燭とか言よつたでしょう。

瀧川 それでもランプよりは明るいけん。神崎の学校の近くに「サンシユクシヨ」があつた。

合田 その頃の食事は一人ひとりの箱膳じゃつたですね。蓋を開けると一人分のお箸やお茶碗、お皿が入っていました。蓋を食台にして食べました。

森下・瀧川 そうですなあ。

瀧川 済んだらそこへ茶碗を濯いで入れるんじやろ。今思うと不衛生じやのう。

―続いて、履物についてお話をお願いします。

八束 ほとんど雨の日や雪の日は下駄です。途中で鼻緒が切れて、下駄のハマの中へ雪がはまってコロコロするし、鼻緒が切れて、冷たいのに裸足で遠い道を帰ったことがあります。これが下駄を履いて学校へ行った中で一番の記憶に残っていることです。あの冷たかったことを今も覚えています。

森下 私の小さい頃は草履でした。東古泉から神崎の小学校まで歩いて行くんです。道は石ころばかりのガラガラ道で今のような舗装をしてないんです。雨のときは下駄でした。昭和六年に入学したんですけど、三年生頃に初めて靴を買うてもらいました。四八銭じゃつたと思います。

―下駄から靴に変わるんですか。

八束 いやチリ草履です。

―それ、いつ頃ですか。

八束 昭和一五、六年頃からですかね。もうずうつとチリ草履で通学しました。

―ご自分でも作りましたか。

八束 作りました。家でも学校でも作りました。自分の足の指に縄を懸けて……。縄を懸けるL字型の道具もありましたな。

合田 作りましたね、習いましたね。

―女の方も？

森下 はい。運動場へ皆な一握りの打藁を持って行きました。「今日はチリ草履作りの日じや」言うて運動場に皆で並んで作りました。上手に作つたら二等、二等……。

合田 チリ草履作ると、小学校一、二、三年生頃はまだ

千人針（出征軍人のために、千人の婦人が敵弾避けの祈りを込めて白地に赤糸で一針ずつ縫った布）は低学年の子は、ようせんでしょう。廊下にずらあつと並んで、婦人会の人が糸を巻いてくれるんです。その針を抜いて次の人に回すのです。千人針を縫うのは何回もしました。

―授業の中ですか。

合田 廊下へ並んで。勉強なんか二の次でした。

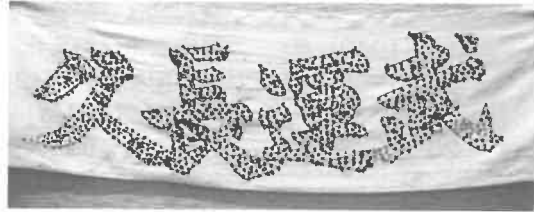
森下 チリ草履を夜、父親か母親が作ってくれます。朝、新しいのが履けるのが嬉しいんですよ。もう帰りは鼻緒が切れていましたが……。〔笑い〕
―中にはボロ布を入れたり竹の皮を入れて編んだでしょ。これは丈夫にするためですか。

森下 そうですね。物を入れとったら丈夫じゃから。布が入つると大分違います。鼻緒に布を入れて作つたら足が痛うないから。

滝川 チリ草履は雨に濡れたらいけない。また長いといかんのよ。長いと、はね上がるけん、足長より短いほどええ。

合田 戦争中、神崎の黒住教会に疎開の子どもが大勢来つたですね。私の父親が暇さえあればチリ草履を編んで、子どもたちに届けようしました。

もう一つ、チリ草履について私が思い出すのは、松山の空襲の晩、松山から徳丸の私の家の横の道を通つてぞろぞ



「武運長久」の千人針

る避難して行くんですよ。ほとんどの人が裸足です。父親が裸足の人に「よかつたら草履を履きなさい、履きなさい」言うていたのを覚えております。

―「八つ折れ」という履物がありませんか。

八束 八つ折れが出たのはいつ頃じゃったかな。今でもぼつぼつあるそうですよ。

―あれは底が八つに割れとるといふ意味ですか。

八束 そうでしょう。片一方が四つ。

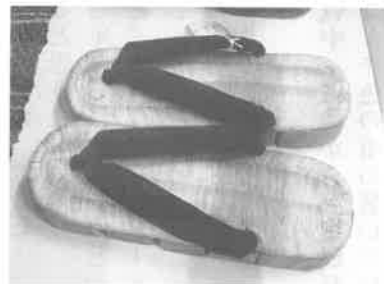
森下 一足で八つになる。

滝川 あれは耐久力がなかった。中川原の東の遠方から八つ折れを鶴吉まで履いて帰つたら、もういつべんじやつたわい。

―ここで話題を変えて蚊帳について伺います。

蚊帳

森下 夜は蚊帳をつらなんだら外ではおられませんでした。昼間は子どもを寝さすのには枕蚊帳という蚊帳がありました。当時は一般に不潔な水溜りが多く、ボーフラ（蚊の幼虫）がだいぶ発生して、網戸もないので家中へ飛び込んできました。寝るときは必ず蚊帳をつつとりました。蚊帳は六畳や八畳づり



八つ折れ

表 終戦前後の衣・食を中心とした社会の動き

昭和11 (1936) 年	国防婦人会発足
15 (1940) 年	大政翼賛会県支部発足
同	「国民服令」制定 男子～カーキ色の国民服正式決定
同	「米穀増産要領」、「米穀集荷配給統制」制定
	生産者には供出、消費者には配給強制
16 (1941) 年	国民学校発足 (～22年3月)
同	生産者単位の戸別割当、米通帳制の配給
同	12月8日 太平洋戦争勃発
17 (1942) 年	大日本婦人会県支部開設
同	「婦人標準服」の制定 へちま ^ま 衿の上着とモンペ
同	「食糧管理法」公布
同	衣料品の切符制 「衣料切符」制定
	食料品は「配給手帳」、農家は「保有米」
18 (1943) 年	戦時衣生活簡素化 女子の服装はへちま衿とモンペが一般化
同	米の配給量 1日2合4 ^{しゅく} 勺 (20年には2合2勺に)
同	「学徒勤労動員令」「女子挺身隊令」発令
20 (1945) 年	7月26日 松山大空襲
同	8月15日 終戦
同	10月 占領軍松山進駐
21 (1946) 年	「物価統制令」発令 月500円の新月生活開始
22 (1947) 年	新学制「6・3制」発足 パンの切符配給制実施
25 (1950) 年	朝鮮戦争勃発 同年8月から「特需景気」
34 (1959) 年	「岩戸景気」始まる 高度経済成長時代への幕開け のちバブルへ繋がる。

なんかで、部屋の大きさに応じたものをつつとり
ました。蚊帳の中に入ったり、中から外に出たり
するときに蚊が入り込むので、近くにおる蚊をウ
チワで追い散らして素早く出入りせんといかんの
です。要領とタイミ^{タイム}ングが要ります。蚊を蚊帳の
中に入れたというて親によく怒られました。
八束 蚊帳に入った蚊を線香やローソクで焼いた
りしました。(笑い)

―蚊帳はいつ頃までつっていたんですか。
森下 昭和二七、八年に止めたと思います
八束 戦後もしばらくは、つとつた。
瀧川 あれはホリドール(農薬)ができてな、蚊
が減ってきたんよ。それと網戸ができて建具が変つ
たのよ。自然に蚊帳がいらんようになったなあ。
しまいまで残つとつたんは西瓜小屋よ。西瓜の番
小屋に持つて行つとつたわい。それはなあ、人が
入らいでも蚊帳つとるいうだけで番になるん
よ。終わりは西瓜の番用じゃった。(笑い)

合田 あはは、人がおると思うて。
瀧川 二七年頃から三〇年までには変わつとつた
な、つらんようになった。大体な、ホリドールが
できたんが二六、七年じゃったと思う。ほじゃけ
ん二七年頃から変わったと思う。
八束 生地^じのごつい蚊帳は風通しが悪いので暑
かった。
―それでは三つ目の「戦中・戦後から高度成長期
前の装い」いわゆる「カーキ色の頃の装い」につ

いてお話を伺いたいと思います。まず、配給制のこと、特に衣料切符のことなどについてお願いします。

瀋川 太平洋戦争が始まる頃、男子はカーキ色（枯葉色で当時は国防色といった）で折襟の国民服（昭和一五年に制定）、女子も「贅沢は敵だ」と言うて、派手なもんは禁止されて、質素で動きやすい婦人標準服（へちま衿の着とモンペ）というのが昭和一七年に制定されたんよ。

男子学生はカーキ色の折襟の服に戦闘帽、足にはゲートルを巻いて、人工皮革の靴かズック靴で通学してりましたな。女学生も軍需工場へ動員されておりました。戦争一色の苦しい時代よな。

八東 終戦までは外に出とりました。終戦後、帰ってから組単位で衣料切符が出たりするの割合もめ（「たごたがおこる」）ましてなあ。「わしはこれに要るんじや」と小競り合いがあったことを覚えてます。

「家にこれをくれ」とか、「何人おるんじやからなんぼくれ」と

言うような個人的な意見を出す人が割合おりました。何もかも不足しとるもんだから、自分方に大部取ろうという自己本位な考え方が割合ありました。

生活物資の配給は、いろいろ物議を醸しましたが、組を通じて行われて、学用品や運動靴などは学校を通じて児童



男子の国民服と女子の標準服

に輪番に割り当てとったと思います。

―ご存知のように昭和一七年には衣料事情が極度に悪化し、全国的に「衣料品の切符制」が実施されました。衣料切符は点数制で、一人当たり都市部では一〇〇点、郡部では八〇点と決められていたと思います。例えば背広は五一点、国民服は三二点、シミーズ（女性の下着の一つ。ワンピース型の下着）は八点などで、点数とお金と引き換えに衣料品や靴などの日用品を手に入れていました。しかし、靴の配給はくじに当たっても現品が無いことがあったようです。

瀋川 太平洋戦争が始まって、田舎でもひしひしと戦争を意識するようになりました。今も覚えてますが、当時の誓いと決意の標語は「撃ちてし止まん、欲しがりません勝つまでは」じゃった。そんな厳しい生活環境でしてな。衣料品は衣料切符、食料品は配給手帳で求めたのよ。農家は自家用の保有米（自家消費米）は許され、そのほかは強制的に供出（国に強制的に米を提供すること）させられた。

終戦前後には、配給の米も止まりがちで、手持ちの着物を少しずつ米と物々交換する「買出し」（俗に言うたけのこ生活）の状態になって、それがしばらく続いたんよ。

―実際の切符使って買い物に行かれたことがありますか。

瀋川 だいたいお袋か親父が行きよったので、私は行ったことはない。

森下 絹物・毛物は二〇点、綿物・モスリン（毛布地）は六点にするからと勧められて買いました。そしたら、値段が高いと父に怒られたのを覚えてます。

合田 私は切符で物を買ったという記憶が不思議に全然ないんです。母親がしとったと思うんです。

森下 切符制はあまり長くはなかったように思いますが。
〔衣料切符の有効期間 商工省―昭和十八年二月―二十六年三月まで〕
月まで。農務省―昭和十九年四月―二十六年三月まで〕

―切符以外で物を出し入れするのは「ヤミ」ですか。

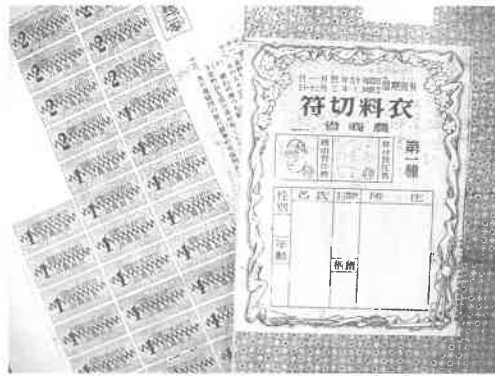
滝川 ヤミもそりやあつたと思います。その衣料品店は余分に売る衣料を持つとるんじゃけん。特に要る人がおつたら切符もなし、まあ金は持つとりますけんあ。金で大部やつたと思いますな。

もともとヤミ物資というのは、進駐軍（終戦後アメリカなど戦勝国の軍隊が日本各地に進出した占領軍。松山には昭和二〇年一〇月に進駐）からの横流しの品物です。食料品は町に出回つとつて、お金と米さえあつたら、ヤミで何でも手に入るようになったりしました。

八束 結婚衣装や晴れ着を買うのに、結局農家を買うのは米を持って売買しよつたな。

滝川 そりや米も使うとる。

森下 私らも大体母親がお米と交換しとりました。松前あたりの人が品物を持つてきては買うてくれました。今でもよう覚えとります。今でも大事にのけとる着物があるんで



衣料切符

すけど、皆お米で買いました。

―現金の代わりにお米で支払いをしたということですね。

森下 はいそうです。

―農家は保有米は認められましたが、決して贅^{ぜい}沢^{たく}な暮らしじゃなかったですよ。

八束 百姓は麦を食べて米を売るような生活をしとりました。

滝川 ヤミ米は長浜の運び屋さんが汽車を利用して日に何回も運んどつた。ヤミ売りができる家は余裕もあるし、一生懸命で米を作る人は余裕があつた訳です。ヤミは値がええもんじゃけん、農協へ出さず、結局ヤミ売りしよつた。衣料切符もヤミでな、お米出して切符何枚かと交換して、その切符を使う人もおつた。

―結婚式など多くの点数がいる場合はどうしていたのですか。

滝川 婚礼の衣装には、数軒の切符を使うて準備するのが普通じゃつた。衣料切符もヤミで買うとりました。

―例えば先の衣料切符の点数は、北伊予村だったら一人八〇点ですよ。モンペでも一〇点、すぐなくなるじゃないですか。

合田・森下 モンペを買うことはなかったです。

合田 母親の手縫いのものを着とりました。

滝川 衣料には普通「晴れ着」、「普段着」、「仕事着」がありますが、衣料切符で買える品物は、普段着程度のもので、人絹（スフ）が多かつたと思います。仕事着は今までもよく聞かれたように古着を再製して着とりました。

作業着は殆ど家にあつた布をミシンで縫うとりました。

一時期、化成肥料の「九・九・六化成」(化成肥料の割合一窒素・リン酸・カリ、一袋約四〇銚)というのが布袋に入ってきたましてな。その布は丈夫で、よく洗濯



「九・九・六化成」の袋

してほどこき、その布で夏の半ズボンなどの作業着を穿いたものです。のちにPTAで小学校へ持ち寄って、その布をミシンで縫い合わせ運動会のテントにもしました。実に重宝したものじゃった。

―皆さんが経験された旧制中学校や女学校あるいは小学校でもよいのですが、どういう服装だったかお聞きたいのです。それと皆さんが過ごされたのは、どういう時代だったか、どんな物を着ていましたか。

合田 私は高等小学校を出て経理学校へ行きました。昭和一七、八年頃です。制服じゃったですね。家では姉のお下がりとか母の手作りの服を着とりました。

旧制女学校の制服は、戦時中は簡袖の和服からセーラー服へ、ベルト付きのへちま衿えちまえりの上着へ、下はスカートからモンペへ。履物は確か黒の革靴から下駄に変わったと思います。

少し話が変わりますが、昭和一二、三年頃です。一日に一度、一本一〇銭のアイスクャンデーを自転車ですり来しました。

へんぴな田舎の子どもには何よりの楽しみでした。これ

は戦後も続いたりしました。

―森下さんはどうでしたか。

森下 私は高等小学校を出て青年学校へ入ったんです。昭和六年に入學したんですが、その頃は着物でした。高二まで行って、それから青年学校へ四年通いましたが私服じゃったです。私服いうても着物なんかは着んかって、手製のモンペです。

―その当時、旧制中学校などの夏と冬の服装は、どうだったんですか。

滝川 旧制中学では詰襟つめえりの服に学生帽、革靴など、みな黒で木綿もめんの肩掛けの袴かはんだけが白じゃった。確か女学校では、夏はブラウスにスカート、履物は黒の革靴から赤い鼻緒の下駄になったと思うな。冬はセーラー服にプリーツのスカート。昭和一八年頃の制服は、へちま衿の上着とひだのないスカートになり、布地はサージから化繊になったと思う。



女学生の制服(戦時中)

昭和一一年までの男子生徒の服装は、黒服(夏は霜降り)じゃったが、一二年以降はカーキ色一色となり、ゲートル、女子はモンペじゃった。男子は一六年から帽子はカーキ色の戦闘帽に変わり、いよいよ戦時色になってしまった。私らまでは、昔

のままの黒と霜降りじゃった。まだ戦時色が薄かったのですけん。中学二年の時、支那事変が起こったんじゃけん。一六年に中学を出てな、出た年の一二月八日の年末に太平洋戦争が起こった。それから高等専門学校へ行ったが、勉強をするんじゃない勤労作業じゃな。方々へ行かされて、勉強する間はなかったですな。

八束 私の記憶では、昭和一八年に卒業した小学校の制服は、黒の折襟で、夏は済川さんが言われたように霜降りじゃったと思います。卒業すると同時に国民服、カーキ色の服に変わったように思うんです。

滝川 戦時色が一段と強まる中、昭和一五年に「国民服令」が出て、男子の服装はカーキ色の国民服が正式に指定されたと思う。冠婚葬祭にいたるまで、なんにでも通用したのよ。

一八年頃になるとみんなが国民服を着るようになって、服装はカーキ色一色になった。当時は国民服にしろ何にしろ、白い布に名前を書いて縫い付けとりしました。特に名前と血液型は必ず書いたもんです。

合田 私らの子どもの頃は、どの家も貧しく耐える生活でした。それでも終戦後の昭和二三、三年頃には海水浴や映画に行ったり、洋服もぼつぼつ跳えたりするようになりました。洋服屋さんが家にも売りに来とりましたね。

八束 割合古着やなんかを持って来とりしましたな。「まだきれいよ、きれいよ」なんか言うて売つとりしました。松山あたりの焼けてない人が品物を持つとるんでしような。そんな古着がぼつぼつ出回つてきとりしました。

それから、呉服や反物やスフや木綿の服地なんかを大風

呂敷に包んで、背負うて行商する姿を見かけるようになってきましたな。

―戦時中、女学生だった昭和二年生まれの私の姉が、次のようなことを書いているのを読んだことがあります。

「私の娘時代は、戦争中という時代を反映して物不足で自由な生活が続きましたが、貧乏だとか、惨めだとか思ったことは一度もありません。みんな同じ状況でしたし、励まし合い、手を取り合つて、明るい未来を信じて生きてきました」と。

全員 まさにそのとおりです。みんな未来に希望を託して生きてきたんですよ。戦争という苦しい時代を生き抜いてきて、「今」があるんですよ。

―昭和二五年に勃発した朝鮮戦争による特需景気で、いくらか生活にゆとりができ、気持ち「食」から「衣」に向かうようになってきたと思いますが……。

森下 言われるとおりです。景気もポツポツ回復して気持ちも前向きになったように思います。皆の顔が変わりました。

八束 私らにも働く希望と勇気がわいてきた。これから日本がかつて経験したことがない高度経済成長期に突き進んでいくんですな。

―長時間にわたり貴重なお話を頂きありがとうございます。

(司会 高石、記録 藤田)

二「食」について

出席者の皆さん

神崎 水口 義一（大正 九年生）
横田 町田 京子（大正 一 年生）
中川原 本田 智（大正 一 五年生）
出作 神野 典子（昭和 六年生）
大溝 栗原キミ子（昭和 八年生）



座談会出席者の皆さん



座談会スナップ

本日の座談会は「食」についてですが、三つに分けて進めたいと思います。最初は「普段の食生活」について、次は「特別な日の食」について、最後は「食生活の改善」についてです。

―それでは、最初に「普段の食生活」についてお話をさせていただきます。戦前あるいは戦争中の食生活についてですが、当時は決まり文句で「欲しがりません勝つまでは」という言葉もありました。また、戦前戦後の食生活や高度経済成長期、いわゆる昭和三〇年代の食生活についてもお話しください。



神野 今朝のNHKテレビを見ましたら、戦後の食べ物何にもない中で食卓にお椀わんが一つ、湯のみが一つありまして、あの頃のことを思い出しました。何も入るものがない時代ですね。野菜の煮っころがしがあるくらいでした。

町田 戦争中、軍人さんはひもじいことはな

かったですか？



本田 私は、ひもじい思いはせなんですが、隊によって終戦間際まぎわには、ひもじい思いをしたと思います。私は昭和一七年から二〇年まで海軍におりました。海軍ですと食べるものには不自由しませんでした。出航する時には食料を積んで出

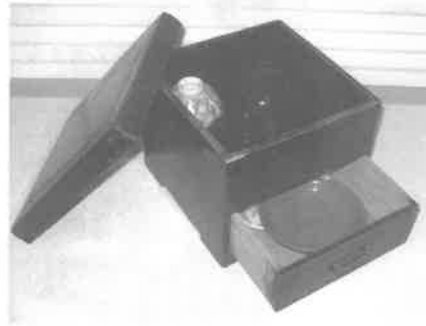
航しますから。

町田 私たち市民は、「欲しがりません勝つまでは」と言うて苦しい思いをしました。

本田 二〇年の九月に中川原に帰ってきましたが食べるものがなく、とにかくお米が高かったです。その頃お米を持つ

米の値段表											
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年
三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年	三十一年	三十年	二十九年	二十八年

米の値段表



箱 膳

ていったら何でも交換してくれよった。例えば貴重な釘やセメントと交換してくれた。昔からのお米の値段表を持っている。昭和二二、三年頃は、ものすごいお米の値段がした。私は貧乏人の百姓じやったもんですから、お米を食べられずに小米や青米を食べとりました。お米のご飯は月に一回くらいしか食べられませんでした。

戦前は茶の間があつて、親父さんは畳の間で子どもや嫁さんは板の間で食べとりました。箱膳があつて何日も洗わずにそのまま箱膳にしまつて棚に置いていました。



水口 戦前は箱膳でその前に座つて、箱膳のふたを取つてそのままひっくり返して置くとテーブルになるのよ。お父さん、お母さん、そして家族が一緒に食事をしたのよ。お茶碗や箸は、お茶でゆすいでふたをして戸棚にしもとりました。

ご飯が炊けると最初につぐのは、お父さんでしたね。そ

して次は、その家で大事な人の順にいいどりましたね。お父さんの次がお母さんということではなかったですな。

町田 御隠居さんがいる家は、父親してお爺さん、お婆さんの順番でした。女性は板の間に座つて食べとりましたね。

食するときには「静かに食べい」と言われました。「物を口に入れて喋るな」とも言われました。

神野 食事の支度ができとつても、お父さんが席に着いて箸をつけるまでは絶対に食べられませんでした。

本田 「男が釜屋（炊事場）に入るな」と言っていましたね。男の値打ちが下がるという意味じゃつたと思います。

神野 そうすると女性が笑われる。

栗原 「男子厨房に入らず」と言うて。鶏やウナギをさばいたりするのは、男の仕事でした。

水口 昔は、ガスがなかった時代で、奥さんは、「くど（かまど）の前都」言うて座つたままで、くどに薪を入れたらよかった。楽じゃし、一番居心地のええところじゃつた。



町田 昔、近所のお婆さんが、「煮材ぎりしかしよらんのかな」と言われました。「煮材」とは、野菜を炊くことというのを初めて知りました。町に住んでいたので、野菜は火にかけて炊くものと思ひました。野菜は炊く以外に生や漬物や醤油の実（ひしお）をつけて食べたりするということを初めて知りました。あの頃のおかずは野菜の炒めたものぐらいいましたよ。

水口 戦前は高等小学校では、実習でお米を作りよつたん

よ。

牛一頭を学校で飼うとったんよ。高等部（今の中学生）の生徒が学校の下肥（糞尿）を担うて行列になつて田んぼに運んだ時代よ。粃すりもしたんよ。終戦直後は、配給いうて生徒にも米を少し分けてもらいよった。

神野 昔は家でお醤油を作つとりましたね。ほじゃから生

野菜にも、お醤油の実をかけて食べよりましてね。

栗原 昔は茄子の麴漬けもして食べよりまして。麴にいっぱい辛子を入れますが、風邪をひいていても鼻がツーンとなるくらい利かせとりまして。切干大根も作っていましたね。

本田 戦前は自宅で蚕を飼うとりましてね。桑の実も食べよりましたがおいしかったですね。

町田 私 は松山で戦災に遭いました。昭和二〇年の七月二六日でした。そのあと横田に帰つてまいりました。主人は二男で学校へ勤めておりまして。長男が後を継いでいました。両親も健在でした。

帰ってくる前から食糧難で、配給制でございました。終戦後、帰ってきてても配給制でした。両親が健在じゃったので、時々母親が「足しにおし」と言つてお米を持ってきたくれるんですね。それを足しにするのが有難かったですね。近頃は学校も給食制となりましてお昼は給食ですが、当時



く ど

主人は、お弁当を持って行きました。麦の中にちよこつとお米が入ってたご飯でした。二番目の娘がちよど赤子で、私の乳が出んものですから、麦の中に少しだけお米を入れたものでしたけど、そのご飯の中に味噌汁を入れて、お湯をとりまして、その後お米の多いようなところを主人のお弁当に入れて持って行かせていました。今考えてみましたら、世の中全般的にそのような時でしたからあまり苦労とは思いませんでした。両親のおかげで戦時中、戦後の食糧難を切り抜けていけたと思います。

それに四大家族で一か月にお米二升（三・六リットル）くらいしか配給がなかったんですよ。その上に、かんころ粉と言ひまして、さつま芋の粉を頂きましてね。雑炊（野菜を入れて煮た汁物で、当時はお米を節約できた）を作ったり、かんころの粉をお湯で練つて蒸し団子にして食べました。かんころの団子は主食ですけれど、うちの子どもらがおやつみたいに食べていますと、農家の子どもさんはそれが珍しいんですね。こちらは配給ですから、うちの子どもは食べとるのに、欲しがるでもなく見ているので、私が「あなたも食べる」と言いますと、珍しいので農家の子どもさんは喜んで食べていました。

うちらの子どもは、それが配給で常食でございました。まあ、戦前・戦後の状態を見ましたら、農家以外の方は大変じゃったと思います。私たちの母屋は農家でしたので、先ほども言ひましたように助けられましたけど、衣類を町の方が持つてこられて、お米と換えて帰つておられるのもときどき見ました。私もそうしたかったですけど、松山空襲の時、全部焼けてしまいました。食料と換えるという

ことはできませんでした。さつま芋の茎の配給もありました。皮をむいて食べました。おいしかったですよ。今「食べ」と言われたらめんどくさいですね。それにお醤油が配給、砂糖が配給、もう味付けをよくしようと思っても難しかったです。人数に比例して配給がありました。それは統制が解けるまで続きました。主人の兄弟も皆成人したものですから、両親から分家として田畑を分けてもらいました。お米を作って七俵できました。その時は涙が出ました。それでも自分ところで飯米（自分の家で食べるのを取っておく米）を取ったら、後は供出（政府などの要請に応じて米や金・物を提供すること）です。あ。あの時は皆さん供出をされていました。戦前・戦中・戦後では、前後の方が食糧難のような気がします。うちの主人の一月の給料が三百円でした。一升（一・八リットル）の闇米が一八〇円しましたからね。よう買いませんでした。母屋の両親が時々気を利かせてくれました。『これ足しにおし』言うてくれました。



飯 釜（はがま）

水口 戦前は麦飯を食べよったよ。しゃぎ麦いうて麦を機械でしゃぎよったんよ。麦をしゃいで平べったにしたものよ。その麦と米とを混ぜ合わせて食べよったのが普通の生活じゃったんよ。麦ぎりを食べよったんじゃないけど、麦飯じゃったんよ。その割合は麦が七分（割）で米が三分で、普通の農家（百姓）が食べとりました。恵まれた家では五

分五分で食べよる農家もありました。麦飯を炊いたら麦だけが飯釜（ご飯をたく釜）の上の方に集まるので、しゃもじで混ぜてから食べよった。おかずは主として野菜やった。今頃の時期やったら茄子の焼いたんやら、煮たんやら、里芋ができとったら里芋の料理。その時の旬の物を食べとりました。

その頃はトマトいうものは無かった。私らが小学校の頃はヌルヌルしておったので気色が悪い。「こんなもの食えるか」と言うとなつた時代です。今のトマトは、おいしいです。里芋、茄子、胡瓜、南瓜なんか、とにかく野菜のおかずで食べよった。お皿一杯に芋なら芋の炊いたものを置いて、近所の店で竹輪や板ぐずし（かまぼこ）を買ってきて一切れ二切れ乗せて、コンコいう大根の漬物があつて、それをおかずで食べよったんです。腹一杯食べよったんです。昔は二合半（約四五〇cc）食べるのが当たり前で、元気なのは五合飯を食いよった。普通は野菜中心で竹輪なんかあまりなかった。よう食べなんだ。花カツオを買ってきて温飯に醤油をかけて食べよった。これもええ方だったようです。

お弁当は、「日の丸弁当」と言って弁当箱の中心に赤い梅干しを一つ入れただけの質素なものじゃった。おかずは野菜中心で、とにかく腹一杯食うということじゃった。刺身なんかは、年に一回くらいしか食べませなんだ。ご馳走を食べるのはお祭りぐらいじゃった。

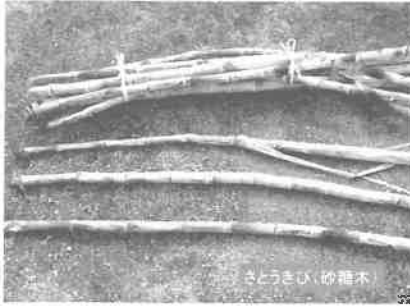
神野 私のところは、おたたさん（松前の魚を行商する女性）が、三日に一回ぐらい来てくれていましたのでイワシをよく食べました。

町田 私らの地区には一週間に一回ぐらい来ていました。お金持ちの家はしょつちゅうお魚を買っていました。

昔は一日四回食べとりました。農家の人は朝早く食べて、一〇時ごろに食べて、午後の三時にも食べて、その後で夕食を食べとりました。

栗原 終戦の時はまだ子どもだったのであまり覚えていませんが、家が農家じゃったので主食は十分にありました。おかずは祖母と母親が作っていました。大きな壺にお醤油の実を作とりました。それからお葉漬（漬物）も大きな壺に漬けとりました。日が経つと色が変わりました。それを食べとりました。

町田 お醤油の実をお魚に付けて食べました。横田地区には池が二つありまして、年に一回皆で魚を捕りに行きまして、それを焼いて藁すばに刺して、それをお醤油の実を付けて一年中食べていました。それがタンパク源でした。神野 私の祖父が中風（脳出血後、麻痺し、半身不随になる病氣）で寝とりました時に、



さとうきび（甘しや糖）

麦ご飯を炊いてお釜の下の方にあるお米のところだけをしゃもじにすくって食べとりました。水口 普段は混ぜて上手につき分けて食べとりました。神野 学校に持っていくお弁当は麦ご飯にコンコ（大根の漬物）で、卵なんかはなかった。水口 戦前は冷蔵庫なんかはなかったたので、すえかけ（腐りか

け）のものも食べとったけれど、あたること（腹痛をおこすこと）はなかった。夏は、したみ（丸く浅いざる）に入れて軒下につるして保管したもんよ。のら猫が来て食べるので子どもが番をしたもんですよ。冷蔵庫などは、昭和三〇年代初めに「三種の神器」（テレビ・冷蔵庫・洗濯機）と言うてようやく持つようになったんよ。私らの神崎には泉が多かったたので、西瓜なんかは、泉の冷たい水で冷やして食べよった。戦後しばらくしてビールなんかも泉で冷やした記憶があります。

昔は胡麻やさとうきびを植えとった。神崎や出作では、畑にさとうきびを植えて、子どもが折って皮をむいで甘い汁を吸いよった。

昔はパンなんか無かった時代で、あんもん言うて、あんこが入っただけのものを売りよった。昔の子どもは店のお菓子の名前を全部知とった。塩せんべい、巻せんべい、小豆せんべい、まつかぜ、クラッカー、えいせいボーロ、こんぺいとう等。今の子どもは



駄菓子屋の陳列

こんぺいとう言うても知らんけど、大人やつたら知とる。店では、ばら売り（あらかじめ袋づめにしたのではなく注文を受けた個数売る）じゃったので、店のおばさんが手でつかんで紙の袋に入れてくれたんよ。それを近所の子どもと遊びながら食べとったんよ。貧しい家は、さつま芋を蒸したんが主食やつ

たんよ。子どもは弁当箱にはったい粉（麦やとうもろこしを炒って粉にしたもの）やさつま芋を入れて学校に持ってきたとたんよ。

昭和一六年に山の学校に赴任した時は、ほとんどの子どもは、はったい粉やさつま芋だけじゃった。弁当にご飯とおかずが入つるのは四〇人おつたら四、五人じゃった。

本田 戦前は小作制度があつて地主と小作人では食べるものが違つてました。供出や年貢で小作人には一反（二〇ア）当たり米一俵（約六〇鎰）しか残らんので、食べる分はほとんどなかった。一反に七俵ぐらいしか穫れなから。

町田 蚕豆ですが、昔は乾燥させて鞆を取って炒つたり炊いたりして食べていましたね。

― それでは、次に「特別な日の食」についてお話し頂きます。おなぐさみとかお節句、お盆、お亥の子、お誕生日、結婚式、お葬式などの特別な日に食べていたものをお話してください。

町田 昔は、四月四日のおなぐさみ（雛あらし）の時ですが、家族の多い家は巻きずしを四〇本くらい巻いて、醤油餅（米粉を使って醤油やしろうがで味をつけて蒸したもの）やりんまん（米粉でこしあんを包んで餅を作り、その上に赤、黄、緑色をつけたもち米を散りばめて蒸したもの）を自分の家で作って、それを持って出かけとりました。それが楽しみでした。その作ったものが一日半でなくなっていました。

水口 おなぐさみの時には、お弁当に巻きずし、醤油餅、りんまん、羊かんか寒天羊かん、そして菱形の色粉で染めたお餅を重箱に入れて持っていた。ひなまつりの時は、



りんまん、醤油餅、寒天ようかんなど



お雛さまに供えるお菓子

餅はつくし、寿司はつけるし、それはおおごとやつたんよ。
神野 昔は自分の家で醤油餅や柏餅（米粉をねってあんこを包み柏の葉で包み蒸したもの）を作っていました。五月の端午の節句で柏餅を作るときには、蒸籠（当時は木製の蒸し器）で蒸して、次のが蒸しあがる頃には食べてしまっていました。それくらいよう食べていました。子どもはお弁当箱に入れて遊びに出掛けました。昔はそんなにお菓子がなかった頃ですから。

町田 地区に桜の木がありました。柏餅や巻きずしなど手作り料理をお弁当箱に入れて、そこでよう食べていました。なくなったら子どもたちは「お母さんなくなつたよ」と言うて、詰め替えに帰りました。子ども同士で換えっこして食べとりました。それが子どもにとつて楽しかつたんです。昔は四季折々の楽しみがありました。

神野 田植の時は準備やなんやかんやで大変でしたが、田植えが終わるとホッとしました。そして街に出かけるのが楽しみでした。おいしいものを食べられるので。



おなぐさみ (岩堰にて)

本田 年に一度の夏祭り、お宮でおむすびがもらえるので、おむすびの数の倍ぐらいの人が並んどりました。食糧難の時にも年に一度じゃったがありました。それからお庚申さん（青面金剛や猿田彦を祀る神様）の祭には、家庭でもお米のご飯を炊いたりしました。

町田 誕生日の祝いごとをするのは最近で、昔はなかったです。お亥の子さん（十一月の亥の日に、亥の子餅をつき、その年に産まれた男児を祝う）の日には餅をついたりしました。

神野 これを「亥の子餅」と言うようになりました。何ぞごとがある、よくお餅をついたりしました。

町田 結婚祝いは、大なり小なりしりました。

本田 葬式のときは、今は仕出しがほとんどですが、昔は近所の人がある家に集まって作ったりしました。

水口 祭りや何ぞごとの時には、ここぞとばかりにご馳走を食べた。

町田 お節句とか田休み（田植え終了後、その地域みんな農作業を休み豊作を祈願していた）とか、お祭りなどで馳走を作りよる間は、世の中あまりぜいたくしてなかった。それが日頃からご馳走を食べるようになってからは、割合そのような行事がのようになった。日頃からご馳走を食べるので、わざわざ忙しいことせんようになった。

神野 地方祭の時なんかは、招待したりされたりしてご馳

走を食べとりました。地方祭の時期が町によって違ったので。

お餅は何ぞごとの時には必ずついて食べましたが、最近の人は「餅なんか要らん」言うて食べません。

栗原 お餅について調べてみたんですが、一月のお正月について、お十五日（小正月）や旧正月、そして四月のお節句や春祭り、一〇月には秋祭り、十一月の亥の子について全部で七回ついたりしました。

—お亥の子さんの時には新米のもち米でついていたのですか。

神野 昔は無理だったと思います。稲を稲木に掛けて天日干しにしとったので、お亥の子さんの時には間に合わなんだと思います。二番亥の子の時に、やっと間に合うぐらいでした。

—餅つきですが、農家では朝は夜が明けんうちから夕方まで餅をついていたようですが。

町田 あられやかき餅（餅を箱などに入れて固め、柔らかさが残っている間に切って、乾燥させて焼いて食べる）も作ったりしましたね。あられがおやつでしたからね。保存食でもありました。今頃の人は「要らん」言うてあまり食べません。

神野 かき餅は火鉢の上で焼いて食べとりました。焼けてくると返るので火箸で押さえて焼いたりしました。

町田 焼くのが上手な人は気が短気と言われとりました。度々ひっくり返すので、上手に焼けるということでした。家にはたいいてい一人はいたそうです。「魚は殿様に焼かせ」と言うて、あまりひっくり返さん方がうまく焼けるという意味です。かき餅といえ、大豆を入れたりお砂糖を入れ

たり色粉を入れたりしとりました。

水口 粳まきの後で残った粳を炒って精米して、焼米を作
って食べとりました。焼米は袋に入れて、子どもが舐上げ
などの時にも持つて行つた。それから、こや豆（蚕豆）も
炒とりました。皮をむいて食べとりました。子どものお
やつ代わりにしとりましたよ。

栗原 粳を炒るための釜戸は、焙烙（物を炒ったり、蒸し
焼きにしたりする素焼きの土なべ）が大きいので家の外に
土壁で作とりました。一斗（約一五升）ぐらい炒とりま
したからね。

栗原 戦後おやつがなかったので、はったい粉（新麦を炒
ってひいた粉）も近所へ遊びに行く時は持つて行きました。
お金持ちの子どもは、お砂糖をまぶしとりましたね。

町田 田植の時なんかは、昔は手植えでしたので時間がか
かるので、小粒の蚕豆を炒って袋に入れて、それを首にぶ
ら下げて田植の途中に食べよつたようですよ。

水口 昔は、蚕豆の炒つたのを口に入れて柔らこうしてか
ら、背負つた赤ん坊に食べさしよつた。固いので、なか
なか柔らこうならんのよ。昔はお月見だけとは限らんが、
お月さんの明るいときには、枝豆を弁当箱に入れて近所の
子どもと試胆会（肝試し）をしたものよ。

神野 お月見には、すりつけ団子言うて、団子を茹でて蚕
豆のあんこの中に入れて作とりました。小豆を作つとる
ところは小豆のあんこでした。

栗原 お正月ですが、大根、にんじん、ごぼう、里芋など
の野菜を大晦日に炊いて大皿に入れておき、お正月の三日
間、食べとりました。今年もみんながために（元氣に）過

ごせるようにと思ひながら作りよりました。

私の家では、年に一度だけお正月に牛肉を買うてすき焼
きをしてくれとりました。私はまだ子どもだったので、外
で遊んでいるとき母親が呼びに来てくれると、すき焼きが
食べられるのだとすぐ分かり、うれしく大急ぎで走って帰
つたことをよく覚えています。でも、お鍋の中はやはり野
菜がたくさん入つとりました。

お正月三日間のお雑煮は、男の人が炊くものといわれと
りました。主婦は、前の晩に材料を準備するだけで、神様
にお供えするお雑煮も、みんなが食べるお雑煮も男の人が
作とりました。お正月くらいは女性を労わつてくれたん
でしょう。

昔はお醤油、お味噌、お豆腐なんかも全部自分の家で作つ
とりました。戦争中、お砂糖などはありませんでした。田
んぼでさとうきびを作り、それをしぼつてもらつて、煮詰
めた黒砂糖を樽で保存して使つとりました。

「最後に「食生活の改善」についてですが、苦勞した食糧難
からだんだん恵まれてきた時代の、いわゆる「生活改善」に
ついてお話し願います。

町田 婦人会の役員を昭和三〇年代初めにしたときに、内
容の一つに「食生活の改善」というのがありました。県か
ら指導者が来て一週間泊まり込みで講習を受けました。終
了すると推進員の証書をもらいました。そして町内の婦人
会で講習会を開いたり、地域から要請がありますと指導に
行きました。昭和四〇年の初めには四国電力から北伊予農
協のところにクッキングカーも来てました。各地区から数

名が出かけて行きました。試食程度の物を作りました。コンロや蒸し器とか電気製品の普及のために来とったように思います。それが食生活の改善につながるということ……。

水口 昔の弁当は、ご飯にちよこつと卵焼きと素干し（いわしなどを天日で乾燥させたもの）ぐらいじゃった。それでは食道がんになるし、長生きできんということじゃった。栄養士が研究したんか、一日に三〇種類の食材を食べんと体の調子によくないと。お弁当もご飯がちよこつとおかずが多くなつた時代。ご飯を食べる時にもお皿数が増え大改革となつた。これも冷蔵庫のお陰である。

町田 今の時代は加工品が多く売られて楽になりましたが、自然のものを使つて手作りするところが大切だと思ひます。

神野 昔は自分の家で出来たものを食べとりましたね。大根が出来た時は大根の料理だけ。季節の物を食べとりました。

町田 野菜を店から買うて帰ることはなかったですね。自分の家で出来るものを食べました。店に出ているものは消毒していますから。家で作つたものは消毒をしていませんから。キュウリが曲がつていようと葉っぱが虫に食われとろうが、そのの方が健康的ですから。農家では農協の指導のもとで消毒しているので、人体には影響がないとも言つとりました。野菜を買う人は、きれいな品物をよう買うとりましたね。

栗原 昔は、畑に下肥をやつて土づくりをして、野菜作りをしとりましたね。それが、身体に回虫がわくということ……でだんだんと化学肥料になりましたね。

水口 食改善というけれど、腹いっぱい食うから長生きできんのよ。昔から「腹八分が病知らず、腹七分で医者いらず」言うてね。何でもおいしいからと言うて腹一杯食べるのは中学生から高校生ぐらいまで。年取つたら腹一杯になるまで食いよつたら、ろくなことはない。お酒もうまいのでよう飲んできた。腹一杯食はずに、少し腹に隙間を残すくらいでやめんといかん。お酒も一緒よ。食改善も本人次第。諺も時には大人と子どもでは違ふ場合もある。



図 夜かわ（三好安明画）

町田 雨が降つた時などは、川にドジョウやカニやしじみを捕りに行つて、それを食べとりました。

栗原 近所ではナマズを捕つて、さばいて天日干しして、焼いて食べていました。それがタンパク源だったのでしょ

う。
本田 仕掛けをしてドンコとかウナギをよう捕つて食べとりましたね。昔の川はきれかったからよう捕れたんですよ。
町田 近所に猟師の人がいて、地域には池があるものから捕つた鴨（かも）をよう食べましたね。

—時間がまいました。本日は、長時間にわたりお話し合ひいただきありがとうございました。

三「住まい」について

出席者の皆さん

永田 中村 文雄（大正一四年生）
 中川原 合田テルコ（大正一五年生）
 横田 徳本カナエ（大正一五年生）
 鶴吉 相原 隆志（昭和三年生）
 東古泉 早瀬 辰郎（昭和三年生）



座談会出席者の皆さん



座談会スナップ

本日「住まい」でお話いただく内容を大きく三つに分けました。最初は「和風の伝統的な住まい」について、続いて「戦後の新しい住まい」について、最後に「戦中・戦後から高度成長期までの住まい」といたしました。

最初に「和風の伝統的な住まい」、中でも家屋敷、家屋の配置、間取り、材料などについてお伺いしたいと思います。



家屋敷全景（昭和45年頃）



上から見た家屋敷

中村 配置図のように、母屋、三尺（約〇・九）ぐらい



離して味噌部屋、風呂、便所そして長屋門（納屋、駄屋、隠居部屋）などがあって、母屋の部屋の間取りは田の字型になりました。徳本 各建物の配置や間取りは、大体同じよう

じやったなあ。

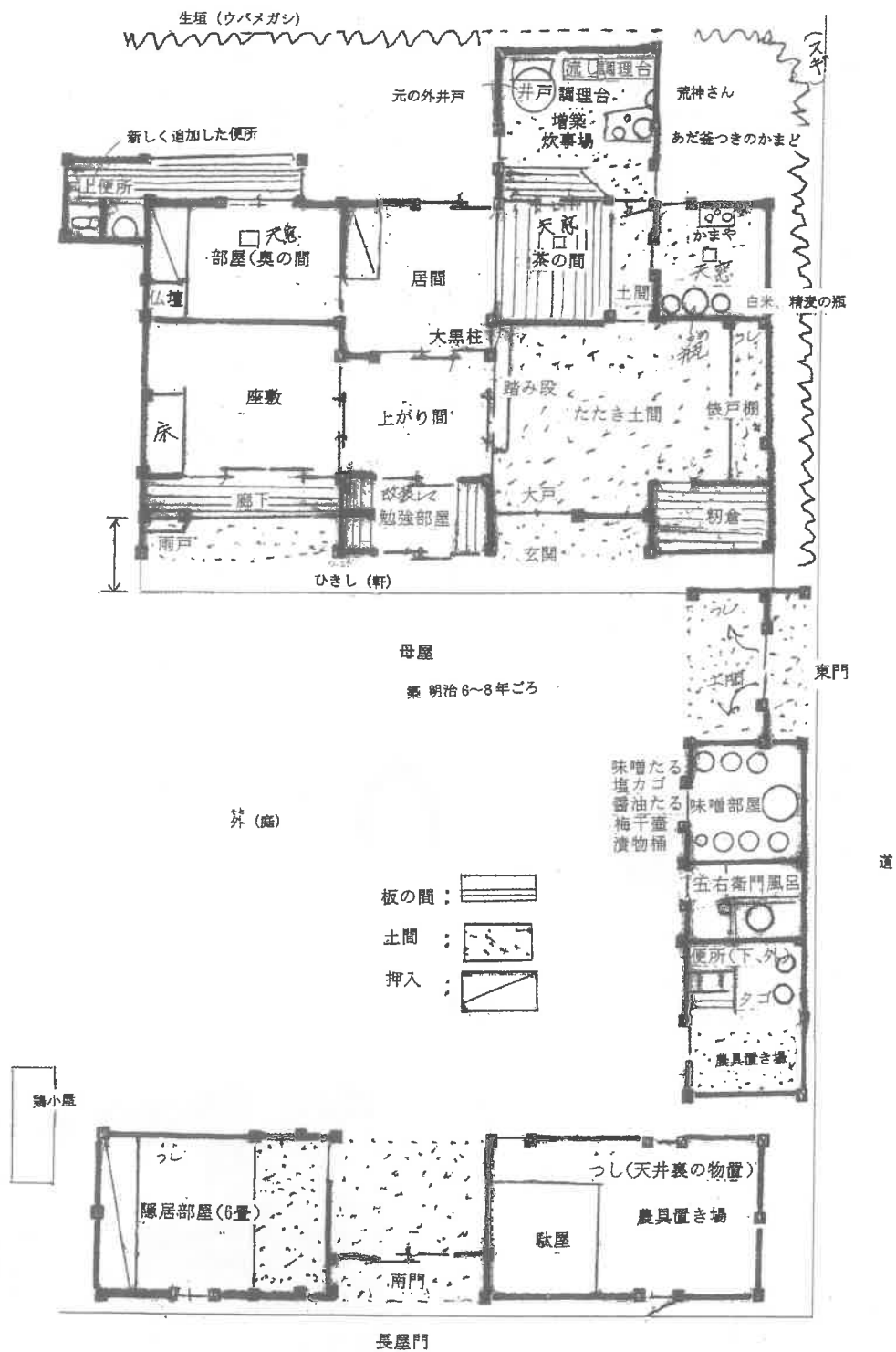


図 建物の配置図 (中村研一氏宅 昭和45年頃)

中村 各建物を離れたのは、火災時の延焼防止だったのだ
しよ。ほかに、水屋の風通しや湿気、駄屋（馬や牛を飼う
部屋）や便所が近いと、汚れたり虫がわいたり匂いがする
ので、衛生面での配慮工夫がありました。

―各建物について伺います。



早瀬 納屋には、たたき土間、つし、^{もみぐら}、わら置場、物
置などがありました。納屋は農家にしかなく
て、家族が住む母屋とは離れていましたね。母
屋と納屋は六尺（約一・八メートル）以上離れとりま
した。

中村 便所と風呂は直結していたが離れた場所にありまし
た。

早瀬 母屋と離れていました。便所は「センチ（雪隠）」と
言いよりました。風呂の排水は必要に応じて下肥（糞尿、
農業用肥料に使った）を薄めるために便所へ流れるようにな
つとりました。便所から担ぎ出しやすいよう道路近くに
ありました。内（上）便所は母屋にくっつきとりました。
かまや（かまどのある所）はどの家も母屋にありました。
隠居にも炊事場を持つ家がありました。

―この家屋敷をみると古いものもあれば新しい建物もありま
すが、必要に応じて次々と建ち揃ってきたものでしょうね。



相原 母屋は、土間を広く取って、土足で出入りしとりま
した。土間は人を迎えたり、作業したりする場
所になつとりました。家によると間取りの中央
部に大黒柱（家の中心にある特別に太い柱）が
ありました。部屋は四つに区切られて、田の字
型に配置されています。南側の前の間と座敷は接客の場所

にもなつて、障子やふすま
を外すと大広間がでまし
た。北側は板張りの茶の間
と奥の間で、寢屋になつと
りました。

早瀬 納屋に「つし（屋根
裏の物置場、中二階）」ね。
つしやセンチは、若者に分
からないでしょうね。

徳本 私が嫁いできた昭和



二二（一九四
七）年、七畝
（約七ア）の屋

敷に鶏小屋があり、ナシやカキが植えてありま
した。母屋の西に二階建隠居（棟札には「明治二十七年建立」
と記す）がありました。

合田 「建立」と書いてありますね。納屋には仕事用具の置



き場所や作業場の外、寝泊りできる畳の部屋が
ありました。お年寄りは跡とり（後継者）に母
屋を譲って、納屋なんかの部屋で隠居生活をし
とりました。

早瀬 東古泉は水量が豊富でした。私方の里の表井戸はい
い水が出ていましたが、二〇〜三〇メートル離れた裏井戸は金
気を含む水でした。

徳本 横田だけでしょうか。納屋の床下は風通しがよいの
で、三尺（約〇・九メートル）ぐらい掘って、すくも（^{もみぐら}）と
わらで芋床をつくり、芋が腐らんように保存しとりました。



田の字型間取りの母屋



つし（天井の上）と俵戸棚（板戸）



おもての^{もみほし}干場
（『わがふるさとわが家族』より）

早瀬 家の床下を掘つとつたところがありました、あまり利用はされてなかったようです。

相原 納屋や母屋の南側に深い庇（軒下^{のきした}やぎね）を作つて、農作業用の道具置場にしたり、雨が降りそうになった時なんかには干しとつた^ほ粃や麦をむしると急いで取り込む場所にとりました。

中村 蔵^{くら}があつた。米を保存する所です。蔵のある家は永田では六〇軒中三軒ぐらいいしかなかった。田が四〇五町（二町は一^{ふた}畝・一〇〇^あ）ないと要らなんだね。

徳本 小作の家が多かつたでしょ。蔵は必要なかったんです。母屋の俵戸棚^{ひょうとだな}や物置にしまうので間に合いました。

中村 農家の間取りは、玄関からみて母屋の土間の右横に^{もみぐら}粃倉があつて、^{もみす}粃摺りが終わると、むしろを二〇〇枚ぐらいいしまいよりましたなあ。空気穴が付けてあつた。俵戸棚は玄関や土間から行けて、物の出し入れしやすい位置にあ

りました。俵戸棚の中の温度が上がらないように東側を杉垣にしとりました。

早瀬 私方の^{もみぐら}粃倉は母屋でなく納屋にありました。米は蔵に保存しました。

中村 俵戸棚は、年一回、板目を紙で目張りして虫殺しをしよりました。一年分の食糧米や麦や雑穀類を保存しとりましたな。食糧米（保有米）は一人四俵（二俵は六〇^{きと}）あつて、私方八人で三〇俵余り親父が置きよりました。

相原 土間は作業場の他にかまや、^{もみぐら}粃倉や物置、茶の間や上がりの間、俵戸棚なんかへの通路にもなつとりましたね。

中村 方角を大事にしとつた。風水学（中国で風・水・地形の学問。家相^{かそう}など）に基づいてつたな。

徳本 そうですね。日当たりや水回りに、家相がどやらか言つとりました。家相でいうと、母屋の裏の北東が表鬼門、南西方向が裏鬼門で空けるとか。建築相談の時なんかは、棟梁^{ちりやう}さんが、鬼門や年回りのことを教えてくれました。お年寄りからも聞きました。

中村 鬼門に当たる土塀^{どべい}や生垣^{いけがき}も、ここは表鬼門じゃからと言うて、欠いだり丸めたりしとりました。

徳本 「屋敷に対して建物をこう建てるが、ここだけは空けるほうがよい」というようにしとりましたね。内便所の前は、目隠しにヤツデやシユロチクを植えとりました。

―次に長屋門を構えた農家の住まいについて伺います。

相原 長屋門は棟の長い道路沿いの建物ですな。中央に入り口があつて、暮らしに必要な物をしまつておく場所や、唐箕^{とうみ}（送風して米や麦の良否や混入物を選別する機械）なんかの農具を置く場所になつとりました。出入り口をはさ

んで、寝起きできる隠居部屋や駄屋がありました。家によっては便所や風呂もありました。

「配置」に関するまとめ 家族の生活場所（母屋）

座敷…床の間、神棚があり祭事、弔事、人寄せなどの接客に使用

茶の間…一家の食事場所、畳部分と板間

落し間…少し低い板間

部屋…両親の寝室、奥の間（寢屋）唯一の押入れがある。

便所…上用と下用がある。便溜へ直結

風呂…外焚き、五右衛門釜、水は便溜へ流して肥料に。

かまや…かまどがあり荒神様を祀る。

井戸…釣瓶やポンプがあり水神様を祀る。

俵戸棚…食糧米や販売用米、雑穀類をしまう場所

薪小屋…年間使用分の薪を保管する場所

離れ…年寄りの隠居部屋

三畳…その家の子らが寝る部屋

味噌部屋…自家製味噌、漬物などの置場

農業に関する場所

おもて…晴天時に粉や麦をむしろに広げて乾燥する土面

一反（一〇畝）分の粉を広げるとむしろ五〇〜

六〇枚分、面積にして約三〇坪（一畝・一畝）

軒下…母屋の外側にあるゆるい傾きの屋根下の空間で、

「やぎね」とも。

土間…土に石灰を混ぜて叩き固めた床、農作業場兼物置場

納屋…農作業場、農作業用具置場

粉倉…乾燥した粉を粉摺りまで一時取り込む場所

駄屋…馬や牛を飼う部屋

蔵…米や麦などを保管する建物

長屋門…道路沿いの棟が長い建物 門、納屋の役目

中村 長屋門のまん中の出入り口をはさんで土間と部屋がありました。部屋は隠居に使われました。反対側は納屋になつとつて、農機具を置いたり、牛を飼うたり、農作業に必要なわら細工をしたりしました。つしがあつて、わら屋根用の数年分の小麦わらなんか、物をたくさんしまつとく場所にしました。

―非農家の住まいに話題を変えましょう。

中村 戦前、非農家は少なかつたけど、非農家の住まいは農家の住まいとよう似ていました。

早瀬 東古泉で私方の新宅は完全な非農家ですけど、便所は母屋にくつといりました。大工さんが同じでしたから、当然農家とよく似た建て方でした。納屋、粉倉、俵戸棚がないだけです。

―屋根葺き材の移り変わりを聞かせてください。

中村 永田も瓦葺屋根が数軒で、昭和初め頃は、大方がわら葺屋根（くさ屋、わら屋）でした。

相原 小麦わらで葺き上げて、継ぎ目（棟）は大丸瓦を伏せて雨水を防いどりしました。

合田 わら葺屋根は、夏涼しく冬暖かつたでさい。

徳本 私方も私が嫁いできた昭和二年は、わら屋でした。二六年に建て替えた時、平瓦の本瓦葺きにしました。

早瀬 戦後、家や田畑の中にある小屋の屋根を葺くのに瓦

の代用として桧皮（ヒノキの樹皮）葺きを見ましたが、長持ちはせず、セメント瓦に葺き替えたようです。桧皮葺と言っても杉皮を使っていたようですが。

徳本 北伊予は茅よりわら葺屋根が多かったです。終戦あがりに、わら葺屋根をトタンで覆ったり瓦葺にしたりしました。

中村 昭和三五（一九六〇）年

ろ、瓦になる前にトタンで覆った家があったね。わら葺屋根の葺き替え用に小麦わらを一〇年分くらい蓄えていたようですな。大棟の大丸瓦の両側には「水」と文字の入った鬼瓦や鳥龕（屋根の大棟に突き出た丸い瓦）がありました。早瀬 おまじないでしょうね、燃えやすいから。

トタンで覆った屋根などについて、神崎地区の高石修氏と中川原地区の大政百合夫氏から、座談会后、別に聞き取りをしました。

【高石修氏からの聞き取り】

大戸（表入り口の大きな戸）の小さい出入り口を入ると、土間、上がりの間の前には踏み段、太くて丈夫な大黒柱や敷居があります。上がりの間の戸は、上半分が障子で下半分が板戸でした。天井のつしは茅を蓄え、ひさし（軒）の下（やぎね）は乾燥機、農具などの置場に使っていました。記憶では茅の葺き替えや修理は、「内子方面の茅葺職人を呼ばない」と言っていました。屋根裏からは、茅が



わら葺屋根農家と軒下（やぎね）

荒縄で大きな真竹にしっかりと縛り付けられている様子がよく見えました。大人が物を持って立ち歩けるほどのスペースがあります。茅葺家屋の建築年は不明でしたが、トタンで覆った現在の屋根は昭和五五年とのことでした。

【大政百合夫氏からの聞き取り】

下地は江戸末期のわら葺屋根。わらは火が怖いのと屋根材の小麦わらの量やわら葺職人が足りないなどの理由により、やむなくトタンで覆いました。三回葺き替えましたが、今回は全面葺き替える量には足りず、南面だけで済ませました。

今は外観がトタンに見えても、平形屋根用スレート（約五×四二〇×九一〇ミリ）で覆ったもの。昭和四五年ごろ、中川原に屋根葺職人が二人もいて、とても助かりました。

司会者は、母屋の間取りから外の家屋敷、そしてスレート葺、本瓦葺（増改築部分）、蔵、涼み（隠居部屋）、長屋門などまで、確認することができた。

戦前から戦後のわら葺、本瓦葺、わらや茅葺き屋根をトタンで覆った屋根、スレート瓦葺屋根、平瓦葺屋根の様子が分かりました。他に住まいで変わった部分は何でしょうか。



大戸と玄関先（高石修氏宅）



茅葺屋根をトタンで覆った屋根



スレート屋根（大政百合夫氏宅）

中村 屋根の形も変わりました。経費の安い切妻が多うて、入母屋や寄棟は少なかったです。

早瀬 今は寄棟が多いが、切妻は使用する瓦の量が少のうて、構造が簡単で大工の手間が要らない。一番安くあがるので終戦後多かったですね。

壁なんです。壁なんです。軍の通達だったのか、戦時中、飛行機に気付かれたように白壁に塗り替えられました。戦後、新

ないように建物の白壁が墨で黒く塗られました。戦後、新たに白壁に塗り替えられました。

合田 大体どの家も土壁で、竹を縄で編んで、土とわらの粗壁を塗って、中塗りをして、劔（土壁に混ぜてひび割れを防ぐ繊維質の材料）を混ぜて上塗りをしていました。

—これより二つ目に移ります。戦後の住まいは、復興期の住宅難の頃、生活改善などがあって変わりました。その様子を聞かせてください。



図 屋根の形式
（『物語ものの建築史屋根のはなし』より）

うです。困ったのは便所じゃったと聞きました。隠居や納屋なんかの空いた場所はどこも皆入っとりました。詳しくは知らんけど、方々の人が来とりましたねえ。

松山空襲後が特に多うて、軒下でも借りたいと言っとったそうです。

相原 鶴吉もあちこちにおりました。

早瀬 昭和二六（一九五一）年に家を建てました。当時は宅地面積や建坪に厳しい制限がありました。間取りは田の字型ではなく、玄関から中廊下を抜いて部屋の独立と便所へ直接行けるように考えました。

便所は内便所にしました。兼業農家でしたから納屋と広場は別に造りましたが、広さなどの制限はありませんでした。

徳本 昭和二三年当時、便所はひつついとりました。

早瀬 戦前、分家（非農家）の便所と風呂は、母屋から外へはみ出す格好でひつついとりました。昭和一〇年頃そうなっとりました。

—昭和二三年「農業改良助長法」によって、生活改良普及員が婦人会と一緒にあって農村の生活改善を積極的に進めました。当時、女性には農作業に加えて、おくどさん（かまど）は土間に座って柴に火をつけて薪をくべる、流しにしゃがんで洗い物をする、何度も井



母屋と便所



レンガ造りのかまどと火吹き竹

戸水を汲み上げるなど、毎日繰り返し返していましたが、その重労働から女性を解放することでした。かまどの改善を手始めに台所改善気運が高まって、農家の住まいも随分変わったと思います。そのあたりをお聞かせください。

中村 かまど、流し、飲料水などがようくなりました。野菜は川（くみじ）で洗った後、井戸水で洗い直して煮炊きしとったのにねえ。合理化によって、引きかえに水に対する信仰心がのうなりました。藪神様、荒神様、水神様なんかを祀ったのに。

合田 そうですね。お正月のお餅（もち）をついても注連縄（しめなわ）張つても、今ごろは何のことはないですね。

早瀬 ス（地方名）のない「くど」からスのある「おくどさん」に変わって、その後レンガ積みになりました。私方は昭和六年頃レンガ製でした。

中村 私の子どもの頃（昭和五年）は、レンガのくどでした。火吹き竹、火ばさみ、火消壺（ひけしづぼ）は便利でよう使いました。

徳本 昭和二二年、私の結婚を機にスのあるレンガのくどにつき替えました。消炭（けしすみ）がたくさんとれて流行りました。相原 おくどさんは、文化住宅ではレンガ造りでしたなあ。

早瀬 レンガの次が文化かま

どかなあ。そして石油コンロ。石油コンロを使い始めて、土間が板張りの台所になりました。私が家を建てた昭和二六年ごろは、土間にレンガ製のかまどをつきました。

中村 昭和二四年の勤務先の自炊生活では、石油コンロを使うようになりました。北伊予では昭和三五（一九六〇）年ごろにプロパンガスが出ました。

合田 昭和四〇年にはプロパンガスになつていましたね。

―井戸水とか水道水について伺います。

中村 戦前は釣瓶（くわいびん）を使うたり、手押しポンプで井戸水をタシクに汲み上げて、蛇口（じやくち）をつけて自家用水道にしました。

合田 そのうち井戸水は手押しポンプで汲むようになりました。

中村 永田は水質のよい水が出るので、鉄管の打ち抜き水を手押しポンプで汲み上げ取りました。また数軒は水位が高いので杓（しやく）で汲んだりしました。

徳本 横田では、県が水質検査をしてくれて、昭和三〇年に簡易水道ができました。

中村 簡易水道は水質の悪かった東古泉、大溝、横田地区に早くできました。

早瀬 昭和二六年ごろから、打ち抜き管の水は手押しポンプで汲みました。金（かね）気を含んだ水でしたから、汲んだ水は横田と同様に濾桶（こしおけ）で濾してから使っていました。

相原 鶴吉は水質がいいので、掘った井戸水を釣瓶や手押しポンプで汲み上げて、そのまま使いました。

―プロパンガス、水質のよい水道水、タイルやステンレス流しなどができて、板張りの台所で調理できるようになりました。「昭和三九年農業改良資金制度」の農家生活改善資金が

使われて、台所や風呂場、便所の改善が一気に進んで、薄暗い台所から明るい台所に変わったようです。そのあたりについて伺います。

早瀬 台所が土間から板間になったのは、その昭和三〇（一九五五）年ごろでしょうね。

徳本 板間にしたのは、電気ではなく石油コンロが入ったころでしたなあ。

中村 三〇年当初か。文化住宅がそうじゃった。土間が板間になって水も火も使えたことよな。流しがタイル張りになった。

徳本 プロパンガスで文化的になった感じがしました。

相原 電気のココンロと釜や、プロパンガスコンロ、ガス瞬間湯沸かし器や炊飯器が出て台所が変わりましたな。

中村 農家は遅かったのではないですか。昼食は板間に腰掛けて食べた。田から戻っていちいち履物を脱いで板間へ上がって食べるのは面倒じゃけん。

徳本 茶の間脇の腰掛けで、土足のまま食べました。土間で食べるのが多かったです。

―昭和三〇年はじめに見られた文化住宅について伺います。

相原 三〇年代前半から見られだした。設計士が作った設計図面をもとに、松山の方から大工さんが来て建てとったと思う。赤なんかのスレート葺きがあった。柱が細うて、屋根や天井は低いけど窓が多く明るい、小じんまりした家でした。よそも見えてきていろいろ参考にしたようですね。

中村 町営住宅や一戸建て杜宅のような造りが流行った。

合田 今は少なくなっただけ、別居か分家に多かったですね。

―ラワンなどの輸入木材や新建材も多く使われて、ニーズに合う住まいが提供されだしましたね。子ども部屋や応接間なども流行っていましたが、そのあたりについて伺います。

早瀬 耕耘機や田植機で農業が機械化されて、住まいも改善されました。私方でも、昭和三〇年ごろ乾燥機にしたので、初や麦の干場が不要になりました。駄屋や軒下、蔵なんかもです。

相原 駄屋や蔵は物置や機械置場になって、干場は車庫や増築用地や庭園なんかに変わりましたな。

工場みたいなカントリ・エレベーター（米・麦の乾燥・初摺り調整場兼保管場）ができて、初摺機まで要らんようになりました。

―昭和三〇年から四〇年代の高度経済成長期は、第一次ベビーブームの児童数急増のピーク時期を迎えるなどいろいろありました。住まいにどう影響を与えたでしょうか。

相原 好景気になって近くの東レ工場や関連会社に勤める人が増えたので、後継者や分家

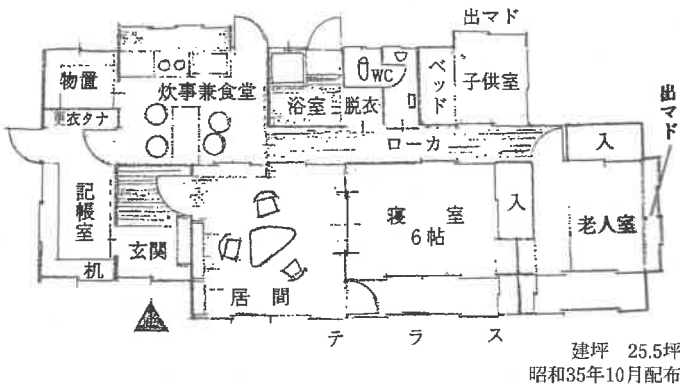


図 愛媛県土木部建築課による農村住宅参考図
（『愛媛、その住まいと暮らし』より）

の農業離れが進みました。農業以外の収入が増えたので、機械化が進みました。農作業が楽になって、生活意識も変わりました。

徳本 家を建てるのは息子。「勉強、勉強」言うて、子ども部屋や勉強場所を造ったですね。

相原 教育問題についてPTAで見学したりしたからでしうかなあ。子ども部屋が増えて、個室化しました。

アパートや住宅住まいを経験した親が多くなったことやマスコミからの情報も生活の意識や様式を変えました。

中村 農業の兼業化や政策の変化なんかで、昭和四〇（一九六五）年ごろから、農家の嫁不足や親との同居生活を嫌がる傾向が見えるようになりました。そうして、住まいが変わってきた。いくら農業が機械化されて楽になっても自分の娘は農家に嫁がさない、という考えが広まったと言います。

最近結婚した人のうわさ話です。お嫁さんがおむこさんに「あんたの親は絶対看ない、あんたが看なさい。」と言ったそうです。それくらい世の中が変わった。同居をしても親を看ないそうです。

徳本 自分が縁付いた夫の親を看ないとは。実家の親に立場を変えて考えたらええ気持ちじゃないねえ。その自分もやがてはそうされるんじゃないか。息子に嫁さんがきたら別居するから、現在親子が一緒に住んでいる家は少ないですね。

中村 昭和四〇年半ばから新しい建築法ができて、住宅建設業者が増えてきたかなあ。

相原 熟練大工の後継者も減りました。

早瀬 建築基準が面倒になったのは昭和五〇（一九七五）年ごろでしょう。

相原 建築の請負もほとんどが会社になった。建築基準が厳しいからでしょうか。

合田 今は審査が厳しいそうですね。出来上がるまでに土地の測量、建築相談、土地の申請なんかで手間もお金も掛かると聞きました。以前は思いついたらすぐ建てられたけど、今はそうはいかんでややこしくなったらしいですね。

「住まい」の変化に関するまとめ

- ① 重量感↓軽量化
（使用材質、屋根、壁・板の厚み、柱の大きさなど）
- ② 自然材質↓加工材質（木、竹、土、石、わら）↓
（セメント、瓦、タイル、鉄など金属、樹脂、集成材など）
- ③ 平屋（一階建）↓二階建
- ④ 分散（分離）↓集合（一体化） 台所、風呂、便所など
（生活場所と農作業場及機械等物置場）（風呂、便所が母屋へ）
- ⑤ 営農と居住兼用型↓住宅型
- ⑥ 少量生産↓工場での大量生産（多種多様品、同一規格品）
- ⑦ 部屋は広いが数は少ない。↓小さい部屋を数多くとる。
- ⑧ 土間の変化 土↓板↓セメント↓タイル↓合成樹脂

相原 土間から板間になった最初の住宅が文化住宅で、この住宅を基にして、ハイカラな住まいに変えてきたと思います。戦後の二階建ても工夫の賜物（たまもの）でしょうか。

―建物は簡単に建て替えることはできない。その時期を待つ

て、根強く残った接客本位の住居を家族本位の住まいに転換しています。そのあたりで何か。

合田 あります。中川原には田の字型の部屋の家が、まだそのままあります。

徳本 言うても中川原は戸数が多いしねえ。

合田 そうそう、自分とこに都合のいいようなお家にしかしてないでさ。

中村 永田で昔の土間が現在残っているのは二軒だけです。もう、踏み段がある家も少ない。

―昭和四〇年前後、応接室や子ども部屋を造りましたが、その状況などはどうですか。

早瀬 うちの本家は踏み段をのけて、上がりの間と一緒にして洋間に変えました。大黒柱も隠れています。元の隠居を別棟にして生活しています。

合田 田の字型の部屋は、私らの子育てごろは、座敷を応接間にして他はそれぞれ子どもが使いよりしました。

中村 変わったのは電灯が増えたことです。大体一軒に電灯は一灯でした。茶の間にあった電灯をコードごと引っ張って、要るところへ持つていきました。晚にお客さんが来たら玄關へ、晩飯のときは茶の間へ戻しよったですよ。定格のヒューズで制限されて、勝手には触れな^ふんだです。また、田の字型住居の北屋根には天窓があつて、明かり採りにし^とりました。

―今日の座談会で、いろいろ分かつてきました。北伊予は昔からの米どころで、住まいは農業経営と直結しており、農業作業スペースが屋敷の半分ぐらいを占めてきたということですね。

戦前では、蔵や運搬通路などが必要のために屋敷構えが広くなつて付属の建物が建ちそろつていましたが、戦後の農地改革によつて農家は小規模になつて、住まいもほぼ似たようなつくりになりました。

戦後は、産業や経済の発展が農業を変え、さらに人々の意識が合理性や個人主義に向かつたので、住まいも変わりました。

本日は、有意義な話し合いをして頂きありがとうございます。

(司会 大政、記録 小松)

Ⅱ 北伊予の小字（ホノギ）

明治一五（一八八二）年、地名調査が全国的に行われ『段別畝順帳』（野取図）に記載されている小字（ホノギ）が県に報告されている。

明治九（一八七六）年、北伊予九地区（藩政時代は村、のち大字）の戸長が愛媛県権令に提出した『段別畝順帳』では、徳丸二八、中川原一五、出作三八、神崎三八、鶴吉二二、横田七、大溝三、永田四五、東古泉二六の小字（ホノギ）がある。

昔は番地がないため田を間違えないように区別しなければならなかったため、耕作者が自分の土地へ杭を立て隣の田と区別し名前をつけた。これがホノギ（保乃木・穂乃木）の謂われとされている。

明治に入ってこれを小字とし、これらの地名を明治時代になって土地台帳に記し現在に至っている。

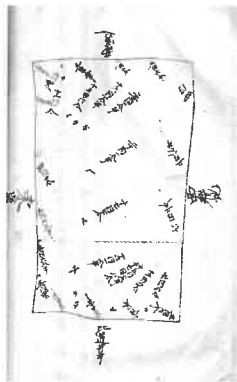
この小字（ホノギ）の名称（小字の由来・謂われ）は、寺社、水利、人名、屋敷・殿蔵、開発及び制度、条里制、地形、古墳、城に関するものなどに大別される。

「Ⅱ 北伊予の小字（ホノギ）」では、(一)大字の起源や由来、(二)小字（ホノギ）の由来や伝承、(三)小字（ホノギ）図の三つに分けて記載した。

掲載にあたり、大字の起源・由来・伝承等は主に『愛媛県の地名』（平凡社）、『松前町誌』、『北伊予の伝承』などを参照し、慶安元年『伊予国知行高郷村数帳』から一六四八

年の石高などを記した。また『段別畝順帳』の写真については、愛媛県立図書館所蔵のものを使用させてもらった。小字の由来や伝承等については不詳なものも多く今後の研究に待ちたい。

明治九年、各戸長が県に提出した『段別畝順帳』（野取図）



「野取図」の内容 田一筆ごとの記述内容

（大字神崎所蔵）



神崎村 第六番耕地字櫻木・
紺屋分・豆尻「野取図」

一 徳丸の小子（ホノギ）

（一）大字の起源や由来

現松前町の東南端の地区。地域の東北を重信川が流れ、西は出作、北は中川原地区に接する。かつて重信川の河道の時期があったと思われるが詳細は不明である。早くから開発され、寛永一二（一六三五）年に松山藩松平氏就封以来、村名改変や分郷のなかつた一つである。

この地には中世に「得丸保」という荘園が存在したが、成立事情は明らかではない。『忽那家文書』、『高忍日売神社文書』によればこの得丸が転じて徳丸になったとも考えられる。南北朝時代には徳丸の名が記録されており徳丸とは徳米から転じたとも考えられる。「この氏神高忍日売神社は古く、延喜式内社であり、徳丸はその荘園の一部であつたから神社に対して米を収めていたので、その名が出たのであろうか？」（高忍日売神社宮司談）

慶安元年『伊予国知行高郷村数帳』（一六四八）の伊予郡の項に「高八一三石三斗九升三合、うち田七五三石三斗八升一合、畠六〇石一斗二合」とある。江戸時代を通じ松山藩領。

徳丸地区の由来については詳らかでないとしていたが、三好憲之氏は『松前史談第五号』（平成元年三月号）に、「徳丸は地形的に重信川に沿った扇状微高地である。自然堤防、河岸段丘のような高所はトコと言い、それがトクに転化して徳の字に当てられたようである。マル（丸）は韓国語の山の語源はマラであるが、マラが転じてマルになった。このマルに日本では丸の字が当てられた、丸は山岳だけで

なく集落にも用いられている。

そこで徳丸の場合、地形的には扇状地の扇端、ないし自然堤防状の微高地を意味する古語のトクに徳の字を当てる韓国語に由来する。集落ないし村落を意味するマル（丸）をそれに取り入れて『徳丸』の地名が発生し、集落が発展したと推定しても無理はなからう。」と述べている。

（二）小子（ホノギ）の由来や伝承

徳丸のホノギは『段別畝順帳』によると二六ある。

なお、『角川日本地名大辞典』によると二八あるが、次の二か所が重複していると思われる。

三島地（三島尻）

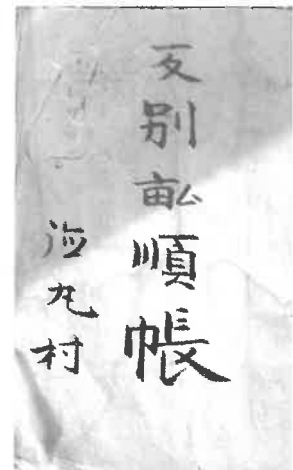
上久保（上窪）

番号は地図番号である。

- ① 佐原田（さわらだ） 不詳
- ② 出 淵（いずぶち） 低地で湿地帯であつた地域
- ③ 一丁地（いっちようじ） 条里制に由来
- ④ 宮ノ前（みやのまえ） 高忍日売神社の前にある地域
- ⑤ 宮ノ浦（みやのうら） 高忍日売神社の後方にある地域
- ⑥ 三宝井出（さんぼういで） 地下水が豊富な水源があつた。
- ⑦ 場 所（ばしよ） 不詳
- ⑧ 上久保（かみくぼ） 低地で湿地帯であつた地域
- ⑨ 燈明田（とうめいでん） 神社の燈料の費用を供する田の地域
- ⑩ 恵美子（えびす） 夷子神社跡の地域
- ⑪ 出 口（でぐち） 不詳
- ⑫ 泉ノ元（いずみのもと） 地下水が豊富な水源があつた。

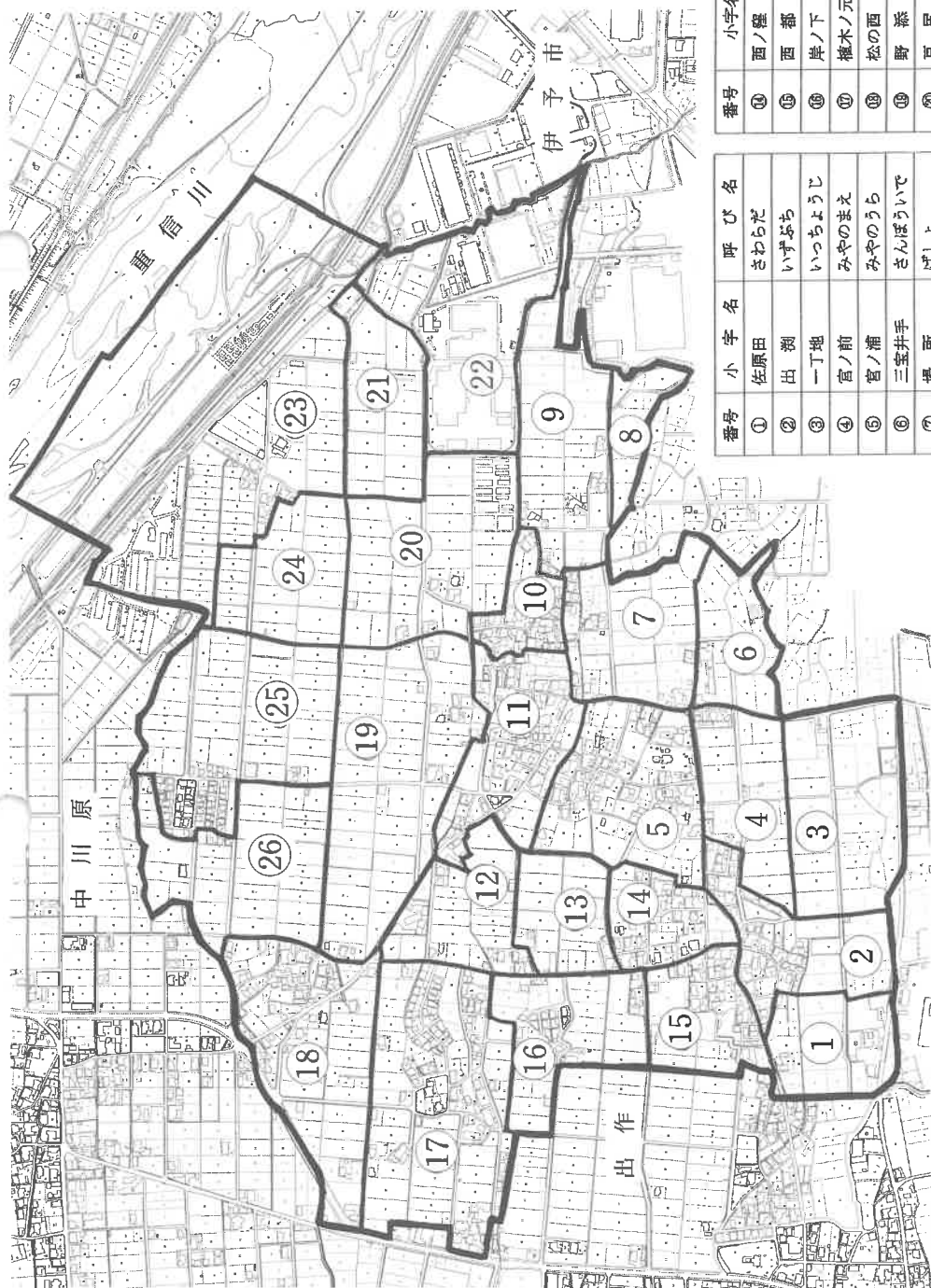
- ⑬一ノ宮 (いちのみや) 一の宮神社跡の地域
- ⑭西ノ窪 (にしのかぼ) 低地で湿地帯であった地域
- ⑮西都 (さいと) 不詳
- ⑯岸ノ下 (きのした) 水源(泉)の西(下流)で段差が大きかった場所
- ⑰植木ノ元 (うえきのもと) 不詳
- ⑱松ノ西 (まつのにし) 地域の東側に松の大きな木があった。鶴が営巣する程の高さであった。
- ⑲野添 (のぞえ) 不詳
- ⑳豆尻 (まめじり) 不詳
- ㉑三島地 (みしまじ) 不詳
- ㉒五屋敷 (ごやしき) 蔵屋敷があった地域
- ㉓北野 (きたの) 不詳
- ㉔四反地 (よんたんじ) 条里制に由来する
- ㉕天王 (てんのう) 天王さん(神社)のあった地域
- ㉖諏訪 (すわ) 諏訪神社のあった地域

徳丸村の段別畝順帳



(大字徳丸所蔵)

(三) 徳丸の小子 (ホノギ) 図



番号	小字名	呼び名
①	西ノ壁	にしのかほ
②	西ノ都	さいと
③	岸ノ下	きのした
④	榎木ノ元	うえきのもと
⑤	松の西	まつのにし
⑥	野添	のぞえ
⑦	豆尻	まめじり
⑧	三島地	みしまじ
⑨	五屋敷	ごやしき
⑩	北野	きたの
⑪	四反地	したんじ
⑫	天王	てんのう
⑬	藤防	すわ

番号	小字名	呼び名
①	佐原田	さわらだ
②	出洲	いずぶち
③	一丁地	いっちようじ
④	宮ノ前	みやのまえ
⑤	宮ノ浦	みやのうら
⑥	三宅井手	さんぼういで
⑦	揚所	ばしょ
⑧	上久保	かみくぼ
⑨	姫明田	とうめいでん
⑩	恵美子	えびす
⑪	出口	でぐち
⑫	泉ノ元	いずみのもと
⑬	一ノ宮	いちのみや

二 中川原の小字（ホノギ）

(一) 大字の起源や由来

現松前町北東に位置する地区で、北域は重信川南岸に沿った東部と南部の一部は徳丸地区に接する。南西部は出作地区に接し、西部は大間地区境まで広がる。

重信川の氾濫（はんらん）によって砂礫（されき）の堆積した土地を開拓してきたものと考えられる。重信川（旧伊予川）の三支流の中間にできた村落で、隣接する徳丸地区に河原（かわら）という集落があり、ここを中河原と呼ぶようになったとも言われている。江戸時代初期、既にその呼称は文書（もんじょ）にあり、明治初年まで中河原と呼ばれていた。足立重信（あだちしげのぶ）が慶長九（一六〇四）年に重信川を改修してからは、氾濫も少なくなり開拓が進み、石高が増えたようである。

中河原を中川原と記すことはあったが、寛永一二（一六三五）年、松山藩松平氏就封以来、村名は変更も分郷もない。

慶安元年『伊予国知行高鄉村数帳』の伊予郡の項に、「中河原村高八〇〇石、うち田七五九石七斗、畠四〇石三斗」とある。『天保郷帳』（一八三四年）では、「高九二五石一斗六合」となっており、近郷に比べ増高が多かったようである。

(二) 小字（ホノギ）の由来や伝承

中川原の小字は『段別畝順帳』によると一五あるが、土手の内（どてのうち）、須輪（すわ）、中新開（なかしんがい）、沢上（さやかみ）、半三郎（はんさぶろう）、津市原

（つしわら）は、地図番号①から⑨の小字に含まれ、ここでは九つの小字についてのみ記した。番号は地図番号である。

① 新開（しんがい） 東端は徳丸地区と接しており、近くの重信川の河川敷となっている旧運動場は、開発（かいほつ）と言って新開畑で野菜・桑等を栽培していた。

新開の中には更に「須輪」と呼ばれるホノギがあったようだが地番は不詳。これは徳丸地の須訪と接しており広末へとつながっている。徳丸の河原地区には須訪神社（すまう）が祀られていたのでこのように呼ばれていた。須輪や諏訪と記す文献も見られる。

② 横枕（よこまくら） 水利の便のよいことを意味しており、水が比較的にかかりやすい田を有する。集落の中央部を東西に走る一号線と呼ばれる町道、登道の北の重信川堤防から西へと広がっている地帯で、集落の中程までつながる地帯である。

③ 新田（しんで） 素鷲神社（そが）の北西一帯の地で、ここより西は昔、お鷹場（たかば）といって松山藩の狩場で、殿様や武士たちが鷹を使って狩をしていた所だといわれている。大間地区まで雑木の茂った荒地であったが、江戸の終わりから明治初期にかけて開墾した地帯である。

新田の中には「半三郎」と呼ばれる人名を付けたホノギがあったようで、新田北部の重信川堤防のすぐ下に位置していたが地番は不詳。

④ 木下（きのした） 中川原の中央部に位置しており、素鷲神社、宗金寺（そうきんじ）、墓地、ひよこたん泉などがある。

この木下の中には「沢上」（さやかみ）（さわのかみ・さいのかみ）と記された文献もある）と呼ばれるホノギがあったようだ

が地番は不詳。湿地が多く自然に沢ができたと考えられる。

⑤ 広末（ひろせ） 地区の南方に位置し、一部は出作地区と接している。広末川を境に北へと広がる。

この広末の中には「中新開」と呼ばれるホノギも存在していたようで、これは北部に位置し集落と接しているが地番は不詳。

⑥ 永田（ながた） JR予讃線より下（西方）で、永田の西端は大間地区の境まで続く地帯で地下水の豊富な田が多く、またこの地に沿って国近川が流れ、大間を経て下流へと向かう。

この永田の中に「津子原」と呼ばれるホノギが南方に存在していたようだが地番は不詳。

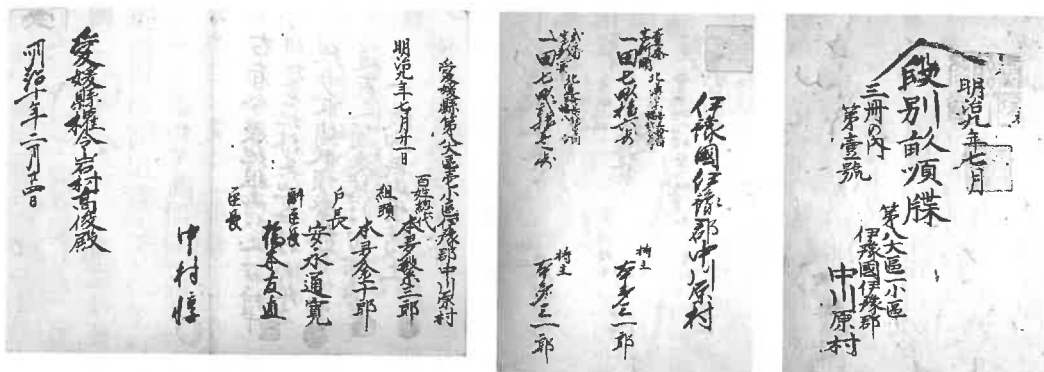
⑦ 藪西（やぶにし） 中西組（現八番組）の西一帯で、昔は竹藪のあった所だと思われる。

⑧ 樋本（ひのもと） 井戸泉より流れ来る水源に懸けられた樋の近く一帯である。懸樋とは、地上に懸け渡し水を引くもので水の立体交差。

⑨ 這上（はいがり・はいあがり） 重信川左（南）岸堤防に近く、西端は大間の境まで続く地帯である。

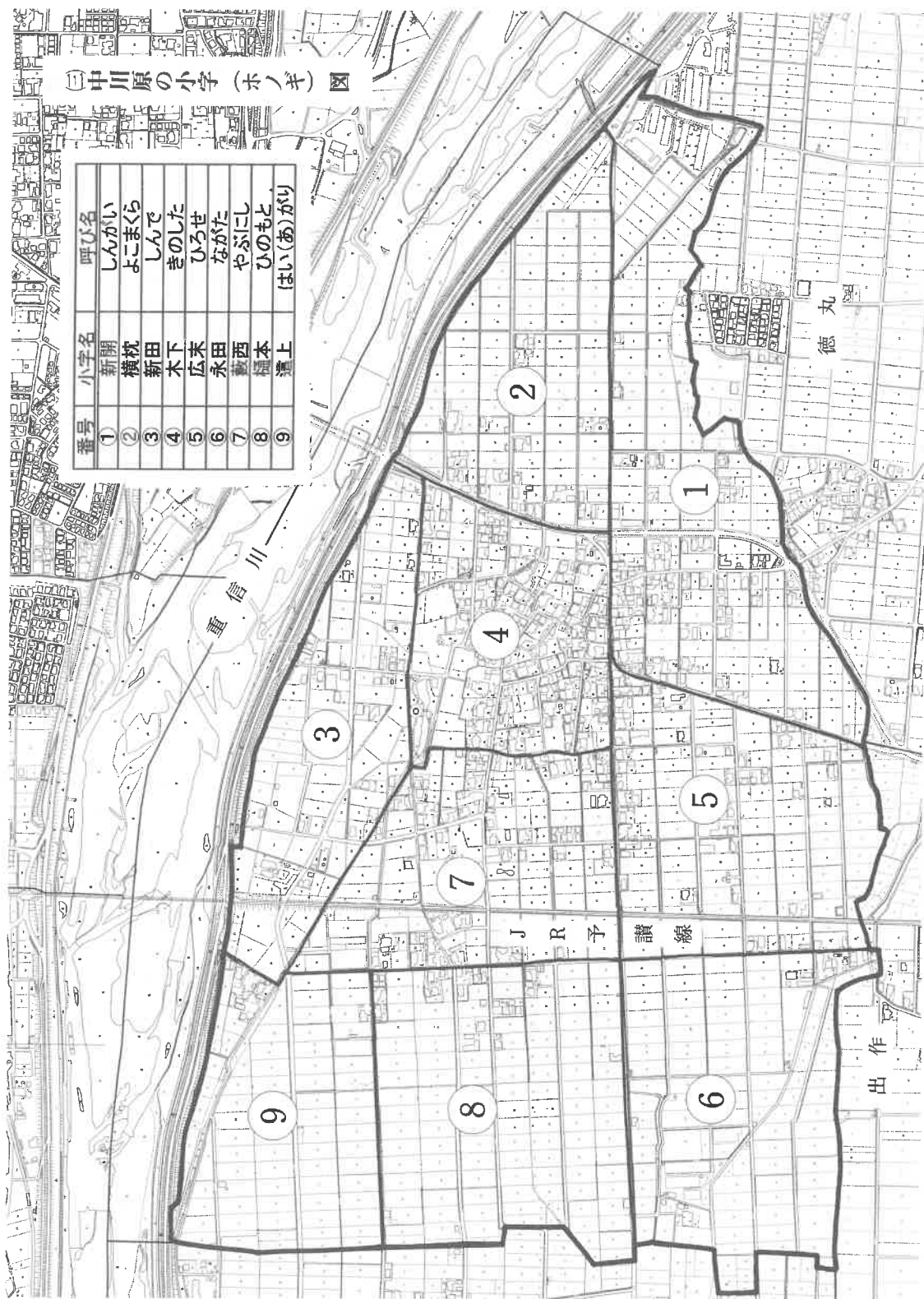
北の二重土手になっている間にはさまれた田には「土手の内」というホノギがあったようだが地番不詳。今この土手はなくなっている。

中川原村の段別畝順帳



三 中川原の大字 (ホノギ) 図

番号	小字名	呼び名
①	新開	しんかい
②	横枕	よこまくら
③	新田	しんで
④	木下	きのした
⑤	広末	ひろせ
⑥	永田	ながた
⑦	藤西	やぶにし
⑧	福本	ひのもと
⑨	遺上	はい(あ)がり



二 出作の小字（ホノギ）

（一）大字の起源や由来

出作には、出作遺跡に代表される古墳時代の大規模な祭祀遺跡があり、近くには弥生時代の有柄磨製石剣を出土した宝剣田遺跡や、古墳時代の古式土師器を出土した遺跡もあり、古くから開けたところであった。松前町内から出土した弥生遺跡は多くはない。その出土地域は徳丸、出作、神崎などの行道山北麓の扇状地末端に位置する地域に限られている。このように出作は松前町の東方にあり、南は伊予市宮ノ下、東は徳丸、北は中川原、西は神崎地区に接している。

「出作遺跡」は、昭和五二（一九七七）年に農業基盤整備の工事中に見え大量の土器類が出土した。遺跡は一万五千平方メートル以上の大遺跡であることが推定され、祭祀遺跡のほか、竪穴住居跡が一所、木棺墓一基が確認されている。出作遺跡は、古墳時代の祭祀の変遷を究明する上だけでなく、律令体制以前の「伊予郡」における原始・古代社会を明らかにする上でも極めて重要な遺跡といわれている。

この出作遺跡は、いずれも延喜式内社である徳丸の高忍日売神社と神崎の伊予神社のちょうど中間地点に位置している。JR北伊予駅の北東約七〇〇メートルにある。

集落の近くに開墾する原野がなくなると、遠いところに耕地を求め、そこに出作り小屋を造り開墾し耕作をするようになる。収穫の時期に寝泊りだけしていたが、やがてその地に定住するようになり新しい村ができた。

この村は神崎出作村として、嘉永四（一三〇六）年石清水

八幡宮の文書に記録されており、この地名の古さが知られている。出作は神崎荘民が莊境を越えて耕作したことと思われる。おそらく出作村にも昔は重信川が流れていた時期があると思われるが、実年代は明らかではない。しかし、寛文年間（一六六一～一六七三）には、出作村と改められている。

江戸時代には重信川からの分水問題で出作、徳丸、八倉、宮ノ下、上野の五か村は上流の麻生村（現砥部町）との間にしばしば論争を起こした。なかでも明和八（一七七二）年の大干ばつに端を発した「明和の水論」は、死者二名を出し関係者は備中代官所に呼び出され、責任者は死罪になったという結果になった。

（二）小字（ホノギ）の由来や伝承

出作の小字は『段別畝順帳』によると二八あるが、由来や伝承について地元の古老に聞いてもわかることはほとんどなく、今後の研究が待たれる。番号は地図番号である。

① 山王（さんのう）

隣接する神崎にも同じ地名がある。山王神社があったことからきた地名であると考えられる。同じ地名のところが後に出作と神崎に分断されたものであると思われる。神崎では、「さんおう」という。

② 塚谷（つかたに）

お塚さん（古墳）があったのでこの名がついたものである。

③ 斎院神（さいのかみ） 災いを防ぐ賽の神、財の神と思われる神様が祀られていたことからついた名前であると思われる。

④ 堂ノ元（どうのもと）

不詳

⑤植松場（うえまつば） 松の木の苗を栽培していたところからこの名がついたものと思われる。

⑥南分（みなみぶ） 不詳

⑦北分（きたぶん） 不詳

⑧鍛冶屋敷（かじやしき） 不詳

⑨前田（まえだ） 氏神様（二名神社）の前にあるのでこの名前がついた。

⑩宮ノ東（みやのひがし） 氏神様の東に位置している。

⑪垣根（かきね） 氏神様の垣根のところに位置していたためについた名前であろうと思われる。

⑫丑寅（うしとら） 氏神様の北東という方角を示すと思われる。

⑬窪田（くぼた） 窪とは湿地を意味するのでこの名がついたと思われる。

⑭屋敷前（やしきまえ） 不詳

⑮町畑（ちやうばたけ） 不詳

⑯伊予ノ本郷（いよのほんごう） 不詳

⑰樋渡（ひわたし） 樋をかけて水を田に送っていたのでこの名がついたと思われる。

⑱地蔵坊（じぞうぼう） 不詳

⑲小松原（こまつばら） 不詳

⑳楠木（くすのき） 不詳

㉑屋敷田（やしきだ） 不詳

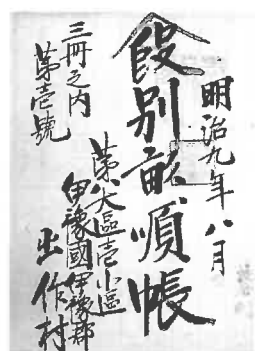
㉒垣添（かきぞえ） 不詳

㉓広瀬（ひろせ） 不詳

㉔松ノ木（まつのき） 不詳

㉕向井川原（むかいかわら） 不詳

出作村の段別畝順帳



⑳大地（だいち） 不詳

㉑河原（かわら） 不詳

㉒国木（くにき） 神崎にも同じ地名があるが、関係も

いわれも不詳。

㉓大里（だいり） 縦横きちんと区切られた条里制が

認められるところからこの名がついたものと思われる。

㉔鍛冶分（かじぶ） 不詳

㉕砥部田（とべだ） 不詳

㉖横泉（よこいずみ） 不詳

㉗烏帽子形（えぼしがた） 湿地の中に、少し高い烏帽

子の形をした土地があつたためこの名がついたと言われている。

㉘八尺井手（はっしやくいで） 川幅八尺（2.4m）くら

いの川があつたためこの名がついたと言われている。

㉙築地（ついじ） 湿地のため入れ土をして田にした。

㉚夏目（なつめ） 不詳

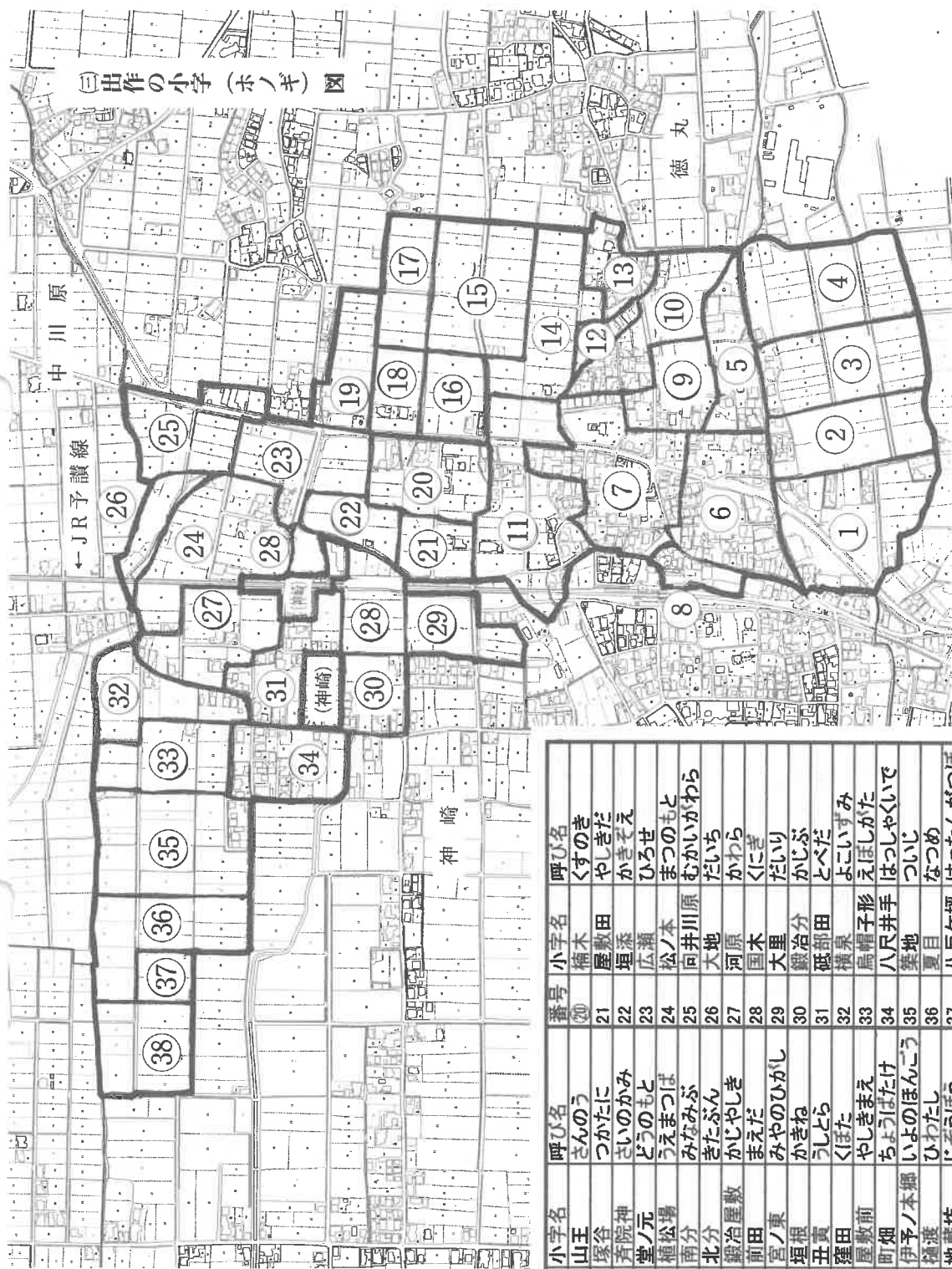
㉛八反ヶ坪（はつたんがっぱ） 大里と同じように条里制

に由来した名前と思われる。

㉜畦田（あぜた） 湿地で小さい田が多く、畦が目立

つ所であつたためこの名がついたと言われている。

③出作の小字（ホノギ）図



番号	小字名	呼び名	番号	小字名	呼び名
①	山王	さんのう	20	橋木	くすのき
②	塚谷	つかたに	21	屋敷田	やしきだ
③	斎院神	さいのかみ	22	垣添	かきぞえ
④	堂ノ元	どうのもと	23	広瀬	ひろせ
⑤	榎松場	うえまつば	24	松ノ本	まつのもと
⑥	南分	みなみぶ	25	向井川原	むかいがわら
⑦	北分	きたぶん	26	大地	だいち
⑧	鍛冶屋敷	かじやしき	27	河原	かわら
⑨	前田	まえだ	28	国木	くにぎ
⑩	宮ノ東	みやのひがし	29	大里	だいり
⑪	垣根	かきね	30	鍛冶分	かじぶ
⑫	丑寅	うしとら	31	砥削田	とべだ
⑬	窪田	くぼた	32	横泉	よこいずみ
⑭	屋敷前	やしきまえ	33	烏帽子形	えぼしかた
⑮	町畑	ちやうはたけ	34	八尺井手	はっしやくい
⑯	伊予ノ本郷	いよのほんごう	35	築地	ついで
⑰	榎渡	えわたし	36	夏目	なつめ
⑱	地藏坊	じぞうぼう	37	八反ヶ坪	はったんがっぱ
⑳	小松原	こまつばら	38	畔田	あぜた

四 神崎の小子（ホノギ）

（一）大字の起源や由来

神崎地区は松山平野の南端、山麓を高速道路が走る行道（さんかい）の扇状地扇端北部、松前町では東南部に位置する。地区西部を一〇メートルの等高線が走り、全地区の高低差が四メートル以内とみられる平坦地である。

古代より人が住み、昭和二二（一九四七）年に中学校の北西八反地（小子ではない）から弥生後期の土器片などが出土している。地区の氏神伊予神社に關する故事が多く、一〇世紀の『延喜式神名帳』などにも記述があり、また、莊園の存在も知られている。『和名抄』には、「伊予郡六郷」に、「神前」（「かんざき」あるいは「かむさき」の読みあり）があり、現神崎を中心とした地域であるとともに、伊予郡で最も早く開けた地域とみられている。また、神崎の地名もそれに由来するものと考えられている。

中世以降においても、寺社に關する伝承等が残され、地区が存在し多くの人々が生活していたことが窺える。江戸期には松山藩で、「北神崎村」と称し、慶安元年（一六四八）『伊予国知行高郷村数帳』に、「石高八六五石二斗八升四合、うち田七九石六斗五升一合、畠六五石六斗三升三合」とある。後世「神崎村」に改称され、明治一〇（一八七七）年には「出作村」、「鶴吉村」との間で人家のない錯雑地の組み換えを行い、ほぼ現在の地積となった。明治二二（一八八九）年の北伊予村成立の際「大字神崎」となり現在に至る。

（二）小子（ホノギ）の由来や伝承

神崎の小子は『段別畝順帳』によると三八ある。番号は地図番号である。

①山王（さんおう） かつてこの地は、各地にある山王神社が鎮座し、山王原という山林、原野があつたので、この名がついたのであるう。なお、出作地区にも「さんおう」と称する同名の小子がある。

②庵ノ浦（あんのうら） かつてこの地の人家は、現在もここにある「禪正軒」なる庵の裏の方にあつたので、それよりついた地名と思われる。

③蔵ノ元（くらのもと） かつて藩の収獲米を保管する蔵があり、殿蔵と呼ばれていたことからついた名との伝承がある。

④立石（たていし） 現在、伊予神社の境内にある道祖神社が、かつてこの地の元県道沿いの民家の間にあり、出産後の乳の出に御利益があるとして「ちちぶさん」と呼ばれていた。等身大の立石が御神体であるので、この名がついたと思われる。

⑤小斎院（こざや） 「斎院」のつく地名は各地にある。本来の字は「斎院」で、神に仕える者が身を清める場所との説があり、この地に鎮座する伊予神社に由来する地名と思われる。

⑥奥屋敷（おくやしき） 南に隣接する小斎院の伊予神社から見て、北奥の屋敷地となるからであろうか。

⑦ソゾノ木（そぞのき） 漢字表記されていない古い地名と思われる。木は紀貫之の祖の系統につながる人たちが住んでいた可能性もあるとの説がある（『北伊予の伝承

Ⅲ。

⑧ 弁 天 (べんてん) この地にあった幸治泉 (幸次の名前もみられる) と新田泉の間の流路に小島が造られ、「弁天様」が祀られていたことに由来するものであろう。

⑨ 古屋敷 (ふるやしき) 特定の屋敷ではなく、地域を指しての地名と思われるが、現在それをしのばせるものはない。出作地区に古代の「宝剣田遺跡」や小字「屋敷田」があることに関するものであろうか。

⑩ 藪ノ鼻 (やぶのはな) 隣接する小字の一面に元庄屋敷の「藪神様」があり、昔はまわりが藪であった。鼻とは先の意味もあり、藪の先の小字名と思われる。

⑪ 道 添 (みちぞい) 不詳

⑫ 向 井 (むかい) 不詳

⑬ 境 勝 (さかいがち) 明治一〇年に人家のない鶴吉地区の土地が神崎に分割編入された旨の文献がある (『田畑分合の儀に付願文書』)。その面積がこととほぼ一致し、それにちなんだ名称ではなからうか。

⑭ 栗田分 (くりだぶ) この地が元は河川の氾濫、堆積などによる「栗石 (栗大の石)」まじりの田があったことに由来する地名ではなからうか。

⑮ 母路分 (ぼろぶ) 不詳。地元では「ぼろぶ」と呼ばれている。

⑯ 樋 枝 (ひえだ) 水路が枝分かれしている場所と解される。かつて、この地の水路を福徳の神寄川北部へ引いていたとの伝承もある。

⑰ 石 橋 (いしばし) 昔は、田圃の荷車の通る橋は重量に耐えられる石橋であった。この地にも石橋があったこ

とに由来するものと思われる。

⑱ 福 徳 (ふくとく) 隣接する鶴吉地区にも同名の小字がある。その境界付近に古来より「オドロ」と呼ばれる自然湧水の低湿地帯があり、ここを水源とする神寄川が流れている。江戸期には泉も掘られ、功徳と幸福の地となるよう瑞称地名 (めでたい良い地名) であるこの名がつけられたのかもしれない。

⑲ 蛭子田 (ひるこだ) 「イザナギ」、「イザナミ」の第一子である「蛭子」の伝説に「エビス」と習合、同一視され神として祀られたとある。蛭子はエビスとも読み、豊漁、航海安全の神であるとともに商業繁栄の神、農業守護の神としても祀られ、エビスのつく地名は多い。隣接の鶴吉地区に「北浦」の小字があるので水辺か、地名に田がつくので農業に関する瑞称地名かもしれない。

⑳ 山 崎 (やまさき) 神寄川北側の山のない地である。かつてこの地の川岸は現在より低く、南岸の鶴吉地区側はこの地の方へせり出し山のように見えたので、その先の地であることからこう呼ばれたのかもしれない。

㉑ 横 田 (よこた) かつてこの地域一帯は他の小字も含めて「横田丁」と呼ばれており、条里制由来の地名と思われる。あるいは、神寄川に沿っていたので川の横に田のある地名で、いずれも小字制定の際分離し、ここが小字名に受け継いだものかもしれない。

㉒ 沓丁地 (いっちょうじ) 条里制由来の地名と思われる。土地の単位、制度に基づいた地名であらうか。

㉓ 桜 木 (さくらぎ) 桜のつく地名は、平地では池とか氾濫、砂礫の地との説 (『松前史談創刊号』) がある。ま

た、木に共通の地名（ソゾノ木の例）、さらには、この地の桜木泉にちなんだ瑞称地名とも考えられる。

②④紺屋分（こんやぶ） 字のとおりに解すれば紺屋（染物屋）の持田があつたのであろうか。ちなみに明治以降北伊予には紺屋があつたとされている。ただ、他の地域の大きな紺屋の持田があつた可能性もある。

②⑤豆 尻（まめじり） アイヌ語の沼に近い土地の意味との説がある（『北伊予の伝承Ⅲ』）。

②⑥宮 田（みやた） 朝廷から伊予神社に神田が寄進されたとの伝説があるが、それにしてはやや遠すぎる感もある。かつての荘園の領田か、他の神社の神田由来の地名かもしれない。

②⑦畔 田（あぜだ） 畔の字は、田のあぜ以外に「ほとり」の意味もあり、この地にある大井手川の畔の田からきた地名かもしれない。出作地区にも同名の小字があり、「あぜた」という。

②⑧四反地（よんたんじ） 条里制由来の地名と思われる。土地の単位、制度に基づいた地名であろう。

②⑨九反地（きゅうたんじ） 条里制由来の地名と思われる。土地の単位、制度に基づいた地名であろう。

③⑩石手地（いしてじ） 不詳

③⑪石ノ元（いしのもと） かつて、この地に大きな石があり、旧大上組の分限者が自宅へ運びうとしたが途中で二つに割れ、一つをこの家に、一つは旧井手下組の旧家の庭に現在もあるとの伝承がある。

③⑫ウツト（うつと） 漢字表記されない古い地名であり、アイヌ語の「湖」や「流入口」の意味からきた地名との

説もある（『北伊予の伝承Ⅲ』）。

③⑬上り水（あがりみず） 大井手川がこの地でL字型に屈曲しており、氾濫時に水が上がつてくるのでついた地名かもしれない。

③⑭大門（だいもん） 不詳

③⑮五反地（ごたんじ） 条里制由来の地名と思われる。土地の単位、制度に基づいた地名であろうか。

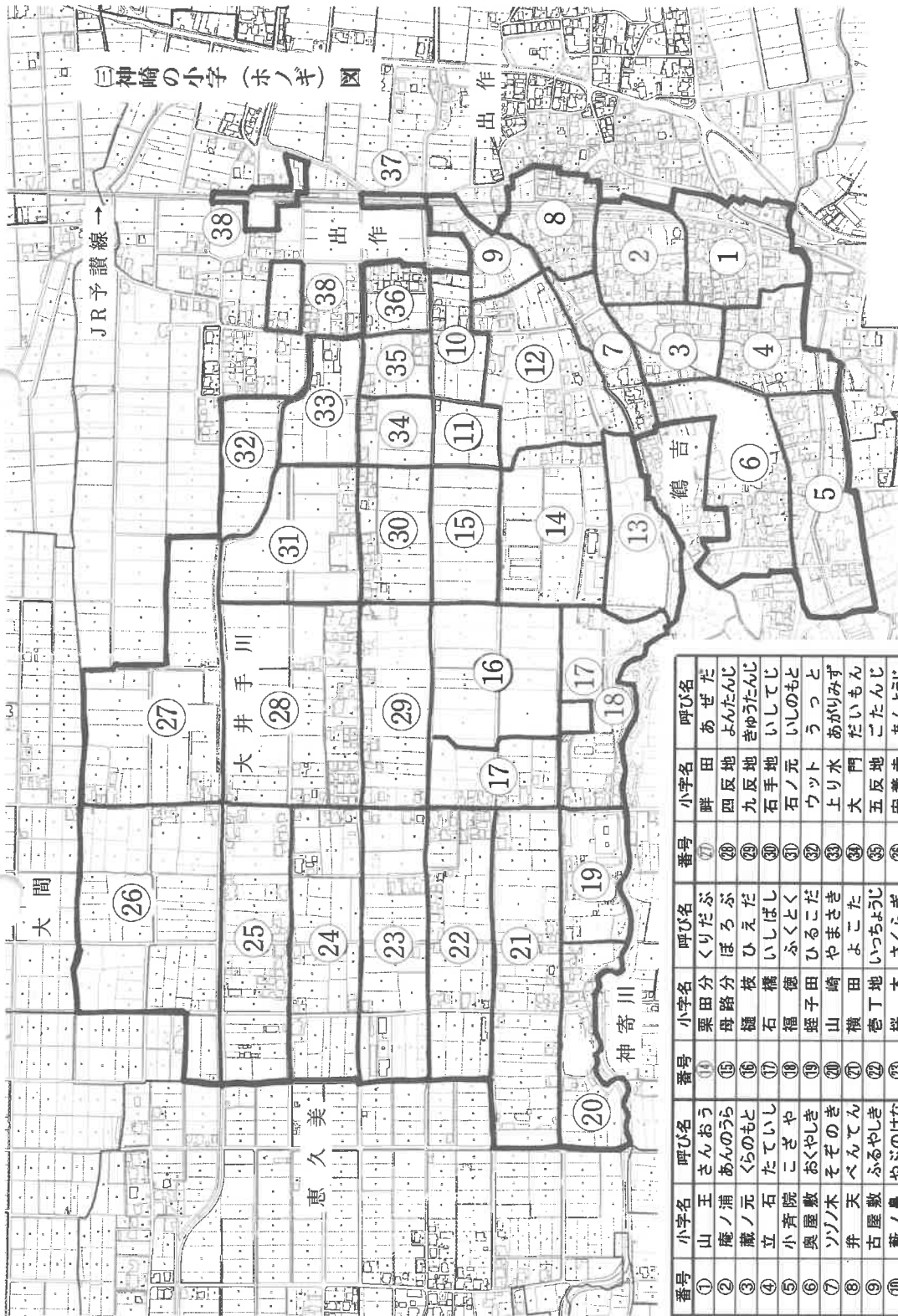
③⑯安養寺（あんようじ）（あんようじ） 近くの小字に、かつて安養寺という寺があつたとされている（『北伊予の伝承Ⅱ』）。当時は同じ地域であつたが小字制定の際の区画整理により分離され、名称だけがこの地域に残つたと思われる。

③⑰国 木（くぬぎ） 木に共通の地名（ソゾノ木の例）もしくは「櫛の木」の語源が国木とする説もあることから、昔はこの地に櫛の林があつたのかもしれない。なお、出作地区にも同名の小字があり「くにぎ」という。

③⑱実安（さねやす） 不詳

神崎村の段別畝順帳





番号	小字名	呼び名	番号	小字名	呼び名	番号	小字名	呼び名
①	山王	さんおう	①④	栗田分	くりだぶ	①⑦	畔田	あぜだ
②	庵ノ浦	あんのうら	①⑤	母路分	ぼろぶ	②⑧	四反地	よんたんじ
③	蔵ノ元	くらのもと	①⑥	樋枝	ひえだ	②⑨	九反地	きゅうたんじ
④	立石	たていし	①⑦	石橋	いしばし	③⑩	石手地	いしてじ
⑤	小斎院	こさや	①⑧	樋徳	ふくとく	③⑪	石ノ元	いしのもと
⑥	奥屋敷	おくやしき	①⑨	蛭子田	ひるこだ	③⑫	ウツ	うっと
⑦	ソノ木	そどのき	②⑩	山崎	やまさき	③⑬	上り水	あがりみず
⑧	弁天	べんてん	②⑪	横田	よこた	③⑭	大門	だいもん
⑨	古屋敷	ふるやしき	②⑫	壹丁地	いつちようじ	③⑮	五反地	ごたんじ
⑩	藪ノ鼻	やぶのはな	②⑬	桜木	さくらぎ	③⑯	安養寺	あんようじ
⑪	道添	みちぞい	②⑭	紺屋分	こんやぶ	③⑰	国木	くぬぎ
⑫	向井	むかい	②⑮	豆尻	まめじり	③⑱	実安	さねやす
⑬	境勝	さかいがち	②⑯	宮田	みやた			

五 鶴吉の小字（ホノギ）

（一）大字の起源や由来

鶴吉は中央を南北に一〇メートルの等高線、東西に県道八倉松前線が走り、並行して長尾谷川が流れる。JR予讃線や大谷川付近を境にして南は伊予市に接する。谷上・行道山麓の扇状地扇端に続く旧重信川の氾濫原上に位置する。明治初期まで神取泉の南は大藪であり、泉より流れ出る川は当時深さ身の丈に及んでいたといわれ（『伊予温故録』）、現在の長尾谷川がそれである。北部のオドロ（改修後は福德泉）は水郷で、多くの魚が生息していた。神寄川はここを湧水源として神崎との境界になっている。

鶴吉は松山・大洲藩相給の村で、村高は慶安元年『伊予国知行高郷村数帳』（一六四八）では、「八三三石余（松山藩領分七四二石余、大洲藩領分八九石余）」である。幕府公簿は江戸時代を通じ釣吉村一村とするが、現地では松山藩領（本村・安井）を「釣吉村」、大洲藩領（加佐）を「南釣吉村」と呼び二村に分けていた。元禄元年（一六八八）頃、松山藩領を鶴吉村と改めると大洲領は釣吉村と称したようである。鶴吉村が大洲藩と松山藩の石高合わせのために替地として分けられたのである。明治一〇（一八七七）年二つの村をまとめて一村になった。

ツル（水流・津流）は、ツラ（連の転化）で、長い流水のある低地にアシが生えた地を嘉字化した地名。ヨシは吉の意味に通じる。ちなみに、加佐も賀佐と呼んできている。

（二）小字（ホノギ）の由来や伝承

鶴吉の耕地は、明治一〇年の耕地整理後、一番耕地と九番耕地に分けられ、小字（ホノギ）数は、康井を入れて二二ある。しかし、『段別畝順帳』、『昭和三三年調製の鶴吉耕地図』では康井の記述はなく二二になっている。番号は地図番号である。

①宮ノ前（みやのまえ） 伊予神社の前にある地で、鶴吉の一番地がある。神社に係のあるホノギ名

②橙 木（かぶすのき） そこに橙の木があったからではないか。植物地名のうち、木にちなんだ地名は多い。

③草 田（くさだ） 草屋（茅葺屋根）に必要な茅を植える田があったと言われる。元禄一五（一七〇二）年以前、草田池が造られていたから水利に係あるホノギ名と言

う説もある。

④辻（つじ） 人が交わる四辻。いろいろなことが起こり、伝説や信仰に係があるのではない。

⑤正 覚（しょうがく） 仏教に係する用語。この地には正覚墓地在現存している。

⑥康 居（やすい） 不詳

⑦安井前（やすいまえ） 通称安井がよく分かる。安井前、康居、正覚、幸殿、禅門田あたりで、鶴吉の中央部。北方は長尾谷川に接する低い地

⑧幸 殿（このの） 仏教に係する用語。ここに幸殿墓地がある。

⑨禅門田（ぜんもだ） 仏教に係する用語。禅門前と言う古地名あり。寺に係すると思われる正覚・幸殿・禅門田が西方へ並んで位置する。いずれも昔の晴光院が、延喜

式内大社伊予神社の南西に広大な境内を有し、七堂伽藍が整い、塔頭一二寺を擁する大寺であったことに由来すると考えられる。

⑩有 枝（ありえだ） 不詳

⑪千 足（せんぞく） 不詳

⑫西之前（にしのみえ） 鶴吉安井稻荷神社の周辺部で、神社西にあたる。安井全体の西方に位置する。

⑬加佐浦（かさうら） 浦は海灣や河川の水に面した地域をいい、舟掛りの適地を示すことが多い。松前町内には浦という小字は九か所

ある。浦は必ずしも海辺とは限らないから、

加佐浦は重信川の前身とみられる伊予川の舟着場とも想定できる。

改修前の鶴吉以西の伊予川河道は、ほぼ長尾谷川筋とされるが、この河道を地名から復元すると、鶴吉神取→加佐浦→大溝→東古泉小字浮橋、神取→茂（藻）賀利田の線となる

『松前史談第二号』（昭和六三年三月）。

⑭神 取（かんどり） 神取の用語はなく梶取で、舟の舵取り、すなわち船頭が住む所をいう。加佐浦の舟掛りに近い。別に伊予神社に關係して付けられたとの説もある。



加佐浦（大洲藩）
農免道路右、手前から後方鶴寿荘前まで

る。伊予神社境内の霊泉や神取泉からの豊富な湧水があったからか。

⑮新 開（しんがい） 開発または制度に關係して付けられたものと思われる。

⑯拂 川（はらいがわ） 神社と關係がある。長尾谷川を下った伊予神社西方を拂川と呼び、昔は祓川と名があることから、伊予神社を参拝する前にみそぎする清流がある地。祓の字の外に払、佛川など表記の改変によるものか、誤字なのか。表記は異なっても、地元では「はらい川」と呼んで受け継がれている。

⑰化粧田（けしょうでん） 巫女さんの化粧代を生み出す稲作栽培地があったとも言われている。

⑱三 滝（さんたき） 鶴吉と永田間で土地の高低差がある。大字の境で川が急に右折するが、かなり落差のある水路に流れ落ちて小さな滝の様相を呈し、近くに水車があった。

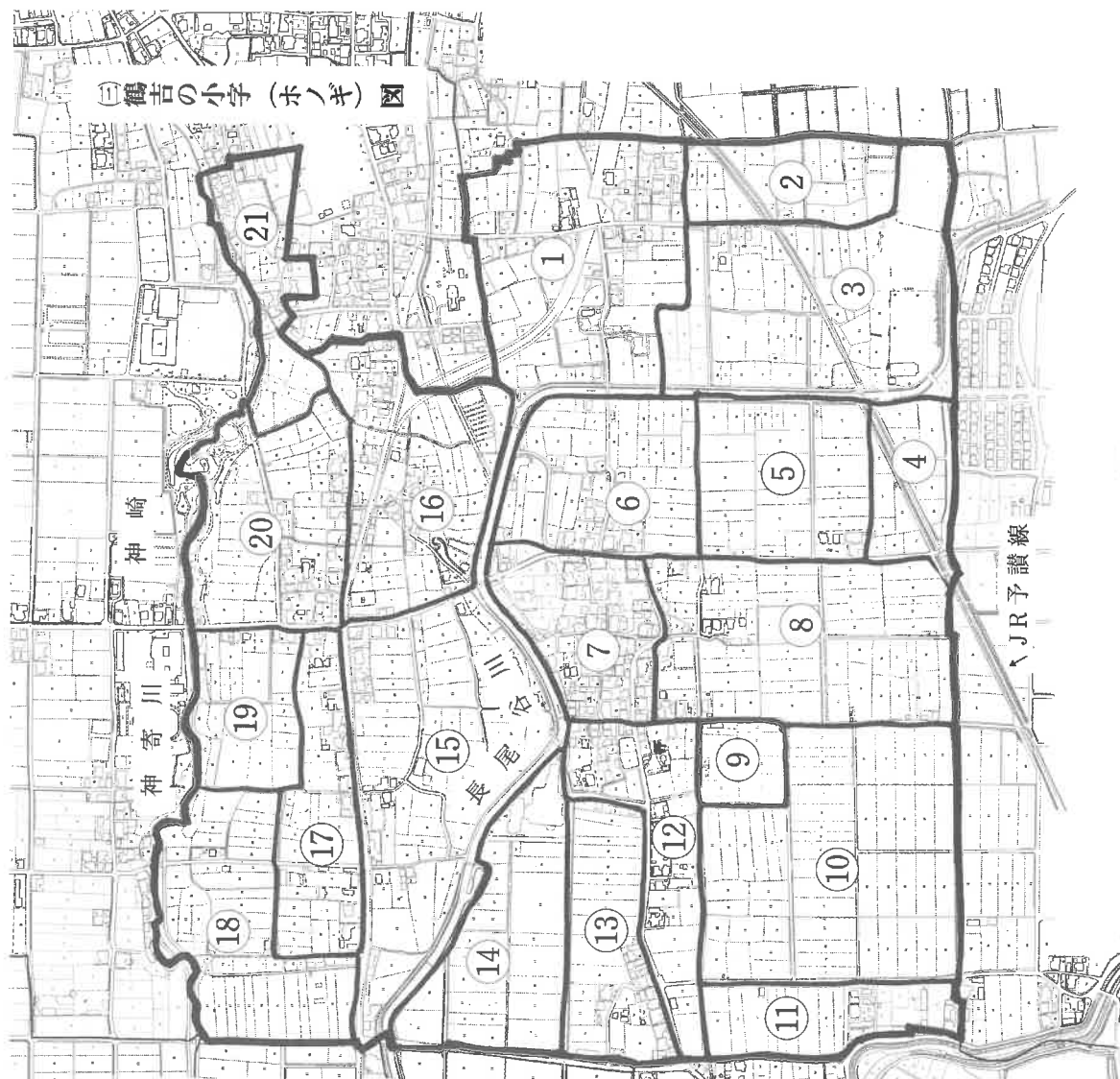
⑲北 浦（きたうら） 加佐浦同様、河水に面した地形に由来すると思われる。

⑳福 徳（ふくとく） 神崎との境界付近にオドロと呼ばれる自然湧水の低湿地帯があり、ここを水源とする神寄川より下流域に水を供給している。地域に福をもたらすめでたいよい地名がつけられたものか。

㉑大 町（おおまち） 条里制に由来して付けられたホノギ名

㉒康 井（やすい） 現在は存在せず不詳

(三) 鶴吉の大字 (ホノギ) 図



番号	小字名	呼び名
①	宮ノ前	みやのまえ
②	橙木	かぶすのき
③	草田	くさだ
④	辻	つじ
⑤	正覚	しょうがく
⑥	康居	やすい
⑦	安井前	やすいまえ
⑧	幸殿	このの
⑨	禅門田	ぜんもだ
⑩	有枝	ありえだ
⑪	千足	せんぞく
⑫	西之前	にしのみえ
⑬	加佐浦	かさうら
⑭	神取	かんどり
⑮	新開	しんがい
⑯	拂川	はらいがわ
⑰	化粧田	けしょうでん
⑱	三瀧	さんたき
⑲	北浦	きたうら
⑳	福徳	ふくとく
㉑	大町	おおまち
㉒	康井	やすい

六 横田の小子（ホノギ）

（一）大字の起源や由来

現松前町南部の農耕地帯。村を東西に流れる大谷川以南はほぼ正方形をなして伊予市域に入り込んでいるが、これは古代の条里制の坪割の名残りとどめるものである。

横田村は、古く大溝村と呼ばれ、慶長六（一六〇一）年に加藤嘉明が家臣に宛てた知行状（木村徳太郎氏所蔵文書）に見られる。

慶安元年『伊予国知行高郷村数帳』（一六四八）の伊予郡の項に、「石高八〇〇、うち田七六二石六斗五升、畠三七石三斗五升」と記すが、五〇年後、元禄一三（一七〇〇）年の『領分附伊予国村補記』に、「高八百石横田村右は大溝村と申候」とあるので、この間に村名が改められたものであろう。江戸時代を通じ松山藩領。

横田村の「横」とは、この地方の方言で「そば」を意味し家の横に道があるといえ、家のそばに道があるという意味に解される。横田とは、水路のそばの田という意味ではなからうか。水路とは、大谷川、長尾谷川のことで、それに沿って東西に延びているところという意味であろう。横（東西）に長い村という意味ともいわれ、村内を流れる大谷川は沖台と本村を南北に分けている。

大谷川の堤防を万代土手^{まんたいど}といひ、出水のたびに決壊し、多量の土砂が流出して耕地を埋没させ、村民の悩みの種であったが、天明二（一七八二）年に堤防が完成し、流路がほぼ現状に固定した。

（二）小子の（ホノギ）の由来や伝承

横田在住の昭和七年から一〇年生まれの方々から伺ったことを『松前町誌』などと照合してまとめたが不詳もある。横田の小子（ホノギ）は『段別畝順帳』によると七つある。番号は地図番号である。

①楠（くすのき） 水利に係のある地名で、池（楠池）平成元年二月、懸樋^{かけひ}が発掘されている）があり、近くに大きな楠の木があった。その辺りに「くすのきさん」と呼ばれる祠^{ほくら}はなかっただろうか。

②財之神（さいのかみ） 寺社に係のある地名で、災いの侵入をさえぎり止める神として、村の入り口や道の辻などに祀^{まつ}った。出作のホノギ「斎院神」と同じ性格のものと考えられようか。昭和五（一九三〇）年開通の国鉄（現JR）予讃線松山・南郡中（現伊予市）間の鉄道敷設工事のため南方にあったものを北方へ移動した。

③泉田（いずみた） 地形に係のある地名で、湧き水が豊富なため、この地に横田地区の住居が集中している。

④蓼原（たでわら） 水利に係のある地名で、大谷川堤防に隣接し、そばに蓼原池がある。

⑤中窪（なかくぼ） 地形に係のある地名で、農耕に適した低湿地地帯を意味している。

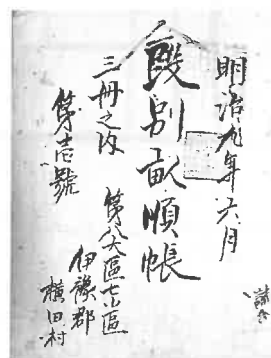
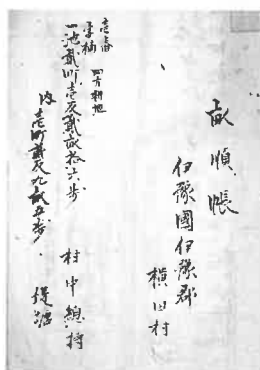
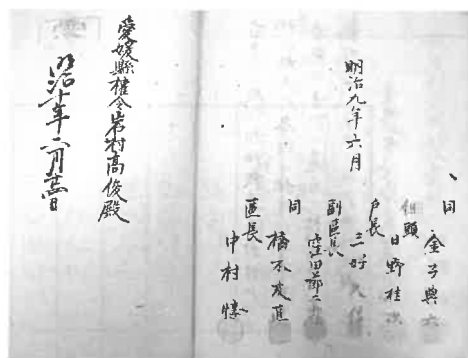
⑥高代（こしろ） 不詳

⑦手作（てさく） 『古文書用字用語大辞典』に、「出作」を見出し語「でづくり」で、「『でさく』とも」とある。また、『日本史用語辞典』には、出作を「でづくり」、「でさく」、「しゅつさく」とも」とある。このことから、「手作」を「でづくり」＝「てさく」と考えられないだろう

うか。田畑を他人に小作（請作）させないで、自ら耕作、経営すること。中世から近世の地主は、小作地に他の手作地を持ち、直営田の経営を行つた。

ちなみに、『北伊予郷土誌』によれば、「出作トハ、昔、コノ原ヨリ田ナド作りニ出タル所ヨリカクハ呼ブナリ」とある。当村の百姓、他村の田地を持ち、他村へ出て耕作することを「出作り」といったことに由来しているようか。

横田村の段別畝順帳





番号	小字名	呼び名
①	楠	くすのき
②	財之神	さいのかみ
③	泉田	いずみた
④	蓼原	たでわら
⑤	中窪	なかくぼ
⑥	高代	こしろ
⑦	手作	てさく

七 大溝の小字（ホノギ）

(一) 大字の起源や由来

現松前町の中南部の農耕地帯。東は鶴吉、南は横田、南西は南黒田、西は東古泉、北は永田に接し、永田との境界に長尾谷川が流れている。

長尾谷川の流路に沿う一帯は重信川（古くは伊予川といひ、この付近を流れていたという）の旧河道で、戦国末期頃に流路を転じた跡と思われる流出土砂の堆積で河床が上昇して、いわゆる天井川をなしたもので、大溝の地名も凹地状の地形であつたため付けられたものであろう。

慶安元年「伊予国知行高郷村数帳」（一六四八）には、黒田大溝村、元禄一三（一七〇〇）年には大溝村となつていたので、黒田村より分村したと思われる。慶安元年の村高帳には、「村高四五二石六斗五升三合、うち田四三二石三斗四升三合、畠二〇石三斗一升」と記され、江戸時代を通じて松山藩領である。

大溝には本村と原田がある。

原田の由来は、『松前町史』によると、「大溝の南に原田という組がある。古くは春田と書かれていた。『ハル』は開墾地を意味するもので、『治』『墾』等の字で表され、『春』『張』などに变化したもので、後に開墾されてできた地区であらう。『春田』より『原田』に転訛したものと思われる。」と記述されている。

一方『松前町大字大溝変革史』（平成一〇年一月発行）によると、原田の西と南は条里制の里の境界で、しかも一等地の良田としてかなり古くから農地化していて、小字（通

称）にも「谷上田」があるように、新田にかかわるものは全くなく、江戸時代の新田開発ではあり得ない。

さらに、元和四（一六一八）年、黒田庄屋の記録に「黒田村庄屋高市より来たり元祖安座成、尤来る者地八町余りにて此地江出作被仰付候」とあり、これと『ハルタ』を結合した創作でしかない。」と記述されている。

また、原田には庚申堂があるが、元和四年頃に正木（松前）古城の石垣を貰い受け、創建されたとの記述もあり、その頃にはすでに大溝村原田と言われていたと思われる。

(二) 小字（ホノギ）の由来や伝承

本村には飼葉ノ木（かいばのき）と叶田（かないだ）、原田には橘（たちばな）のわずか三つの小字があるのみであるが、通称ホノギと称する地名は実に四六もある。

これは推測であるが、飼葉ノ木に関しては『松前町大字大溝変革史』に、「飼葉ノ木の一帯は家畜の餌である雑木が群生していた。」と記載されているので名付けられたのではないか。ほかのホノギは推測もつかなかった。

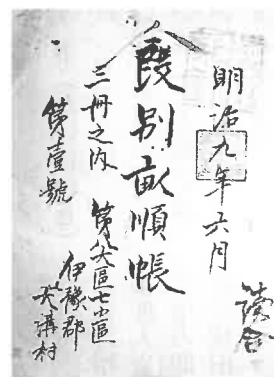
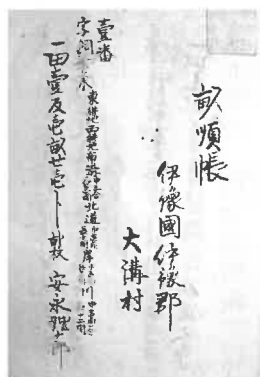
さらに、明治九年の『段別畝順帳』以前にホノギがあることが、『松前町大字大溝変革史』に記されていることが分かった。番号は地図番号である。

(1) 飼葉ノ木（かいばのき）

- | | |
|---------------|-----------------|
| ① 大ぶけ（おおぶけ） | ⑤ 表の川原（おもてのかわら） |
| ② 上かいば（かみかいば） | ⑥ 加入堂（かにゅうどう） |
| ③ 下かいば（しもかいば） | ⑦ 市の関（いちのせき） |
| ④ 永 地（ながち） | ⑧ 山伏田（やまぶしだ）の八 |
| (2) 叶田（かないだ） | |

- 呼び名については文献もなく、高齢者から聞き取りをし
たところ、「自分の土地の呼び名は分かるが、他人の土地の
呼び名までは分からない」と言う。農家の人たちは現在の
小字でなく、明治九年以前のホノギ（通称）で呼び合っ
ている。
- ⑨ 次郎株（じろうかぶ）
 - ⑩ 南次郎株（みなみじろうかぶ）
 - ⑪ 流田（ながれだ）
 - ⑫ 塚田（つかだ）
 - ⑬ 竹の町（たけのまち）
 - ⑭ 源七屋敷（げんしちやしき）
 - ⑮ 屋敷（やしき）
 - ⑯ 前田（まえだ）
 - ⑰ 雁飛（がんどび）
 - ⑱ 葉佐（はざ）
 - ⑲ 八反地（はったんじ）
 - ⑳ 橘（たちばな）
 - ㉑ 井手添（いでぞい）
 - ㉒ 泉の裾（いずみのすそ）
 - ㉓ 穴田（あなだ）
 - ㉔ 年川（ねんがわ）
 - ㉕ 四反地（したんじ）
 - ㉖ 東橘（ひがしたちばな）
 - ㉗ 北土橋（きたつちあわせ）
 - ㉘ 南土橋（みなみつちあわせ）
 - ㉙ 原田地（はらだじ）
 - ㉚ 蔵屋敷（くらやしき）
 - ㉛ 三反地（さんたんじ）
 - ㉜ 五反地（ごたんじ）
 - ㉝ 北高城（きたこうじょう）
 - ㉞ 南高城（みなみこうじょう）
 - ㉟ 西屋敷（にしやしき）
 - ㊱ 浮橋（うけはし）
 - ㊲ 北叶田（きたかないだ）
 - ㊳ 南叶田（みなみかないだ）
 - ㊴ 横蔵（よこくら）の二
 - ㊵ 屋敷（やしき）
 - ㊶ 谷上田（かにかみでん）
 - ㊷ 木綿坪（きわた）
 - ㊸ 永地（ながち）
 - ㊹ 高下添（こげぞ）
 - ㊺ 北見作（きたみつくり）
 - ㊻ 南見作（みなみみつくり）
 - ㊼ 生県田（しょうぶだ）の一七

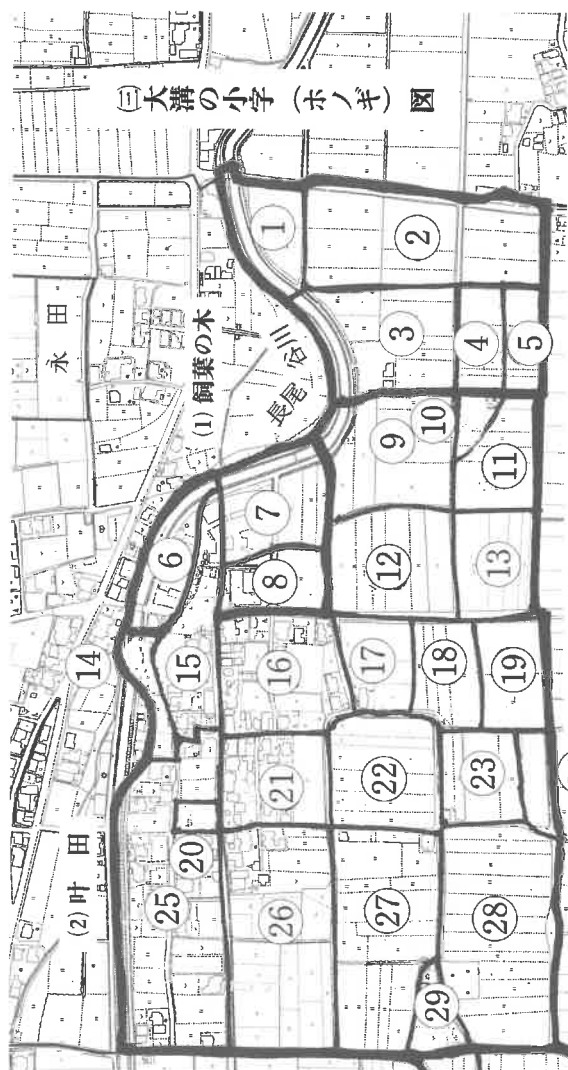
大溝村の段別畝順帳



番号	小字(ホノギ)	呼び名	(ホノギ)通称
①	井手	た	い
②	泉の	い	ず
③	穴田	あ	な
④	年川	ね	ん
⑤	四反地	し	た
⑥	東橋	ひ	が
⑦	北土橋	きた	つち
⑧	南土橋	みな	つち
⑨	原田	は	ら
⑩	原田	や	し
⑪	谷上田	た	が
⑫	木細坪	き	わ
⑬	高下	たか	し
⑭	高下	こ	げ
⑮	南見	みな	み
⑯	南見	つ	く
⑰	生	な	う
⑱	生	ぶ	た

(3) 橋

たちばな



(三) 大谷の小字 (ホノギ) 図

番号	小字(ホノギ)	呼び名	(ホノギ)通称
①	大谷	お	お
②	大谷	お	お
③	大谷	お	お
④	大谷	お	お
⑤	大谷	お	お
⑥	大谷	お	お
⑦	大谷	お	お
⑧	大谷	お	お
⑨	大谷	お	お
⑩	大谷	お	お
⑪	大谷	お	お
⑫	大谷	お	お
⑬	大谷	お	お
⑭	大谷	お	お
⑮	大谷	お	お
⑯	大谷	お	お
⑰	大谷	お	お
⑱	大谷	お	お
⑲	大谷	お	お
⑳	大谷	お	お
㉑	大谷	お	お
㉒	大谷	お	お
㉓	大谷	お	お
㉔	大谷	お	お
㉕	大谷	お	お
㉖	大谷	お	お
㉗	大谷	お	お
㉘	大谷	お	お
㉙	大谷	お	お
㉚	大谷	お	お
㉛	大谷	お	お
㉜	大谷	お	お
㉝	大谷	お	お
㉞	大谷	お	お
㉟	大谷	お	お
㊱	大谷	お	お
㊲	大谷	お	お
㊳	大谷	お	お
㊴	大谷	お	お
㊵	大谷	お	お
㊶	大谷	お	お
㊷	大谷	お	お
㊸	大谷	お	お
㊹	大谷	お	お
㊺	大谷	お	お
㊻	大谷	お	お
㊼	大谷	お	お
㊽	大谷	お	お
㊾	大谷	お	お
㊿	大谷	お	お

(1) 銅葉ノ木

かいばのき

(2) 叶田

かないだ

八 永田のホノギ

(一) 大字の起源や由来

現松前町の中中部、東に釣吉村、北に北江頸村、西に東古泉村、南に大溝村がある。江頸という村名は国近川が村の西方で入り江をなし、この地はその頸に当たるので付けられたものという。

正保年間(一六四四—四八)にこの村は分郷して岡田・永田の二村となったが、岡田村は昭和初年頃に江頸村(もとの北江頸村)に合併したので、幕府公簿は幕末まで南江頸村であるが、現実には永田村であった。

慶安元年『伊予国知行郷村数帳』(一六四八)の伊予郡の項に、「南江頸村、高五九六石八斗四升二合、うち田五八七石二斗八升五合、畠九石五斗五升七合」とあつて畑地が少ない。江戸時代を通じて松山藩領。

地元の中村文雄さんの『永田の地名考』によれば、「何れの資料にも不明が多い。『常山記談』、『統武将感状記』などに、『……黒田・大溝・永田村ノ百姓コザカシキ者四、五人呼ヨセ……』とある。これは、慶長五(一六〇〇)年の三津、刈屋口の戦いの中に、永田村が出てくる。そしてこの戦いの褒美として、永田には「華蔵庵」の山門、大溝には「庚申堂」の石垣が寄進されたという伝説がある。

松前町内には「ナガタ」のホノギを称するものが三か所あるが、何れも「永田」と記し、「長田」はない。「永」は河川の流れる形を表し、支流を伴う豊富な水脈の意。南の「長尾谷川」(古くは、名子谷川・名子川。旧伊予川をいう)や「上須丸川・下須丸川」と北の「神寄川」とにはさまれ、

田地に適した地域であることから「永田」の地名が起つたのではないだろうか。また、「永」には不老長寿・招福などの思想があると聞いた。岡田・永田地区内には、ともに飛び地が多数点在していた。」とある。

(二) 小字(ホノギ)の由来や伝承

永田のホノギは、四五〇?ある。『角川日本地名大辞典(38愛媛版)』によれば四五、愛媛県立図書館郷土資料室『段別畝順牒』によれば、さらに「弓領、行元、郷地、青木、南青木」の五か所の記載がある。これはいずれも恵久美の飛び地のようなものである。

中村文雄さんの「ホノギについての伝承等」に掲載されているものを抽出した。番号は地図番号である。

① 銭 塚(ぜんづか) 水脈は存在するが、水利は不便。戦前三八、四四、四五番地からは須恵器が多数出土した。建設省(現、国土交通省)の調査による古い伊予川の河川図を見ると、付近は伊予川の右岸(北側)に当たり、自然堤防の一部分だった。古代の祭祀跡とも考えられる。維新前後は自家用の「綿」を栽培し製糸から織布まで行っていた。幼少の頃は布団や蚊帳は自家製だった。大正末期から昭和初期には養蚕用の「桑」を栽培していた。その後、干ばつ時に泉を造成。戦後、耕耘機による農耕で、須恵器などは粉碎され発見は困難。宅地造成で住宅地化した。

④ 樋ノ口(ひのくち) 通称「樋ノ元」が存在するから、集落を樋ノ口と呼ぶようになったのか?藩政時には、樋ノ元の上は東西一〇〇〜一五〇以上、南北五〇〜七〇

い程度の溜め池状の場所で、周囲には家屋が数軒あったようである。溜め池の水を、地中に樋門を造成して永田灌漑用水として利用した。この工事は相当難工事であった模様。戦後、河川改修に際して、工事に関係したと思われる壺や祭祀用のものが多数出土した。ここ樋ノ元には、「小豆洗い」伝承があり、子どもは夕暮れ時には近寄らなかつた。元の樋口家の屋敷跡には、大きな松の木などがあり、前の畦道から往還道路までを庄屋道と呼んでいた。

⑤大公家（おおこうげ） 鎮守神社があり、庄屋宅と制札場があつたところ。庄屋宅も草屋。岩鋪天満宮とかかわりのある岩が見つかった。

⑫局（つぼね） 本村の一部。戸数は一番多い集落。永田の中心部であつたと思われる。維新頃までは屋敷が建ち並んでいたという。また、塚跡が二か所あつたが消滅。

⑬蔵ノ元（くらのもと） 図面には三棟あつた。そのうち一棟には、昭和末期まで個人宅地に再建されて居住者がいた。年貢にまつわる口伝も数々あるとか。

⑭古庵（ふるあん） 大正初期までは老松（古株）が生え、一帯が墓地であつた。墓標は移築されて、跡地は耕地として利用された。耕作中に人骨らしきものや鼈甲（海がめの一種、たいまいの甲から作ったもの）の櫛が出土したという。一筆でホノギ。

⑮宮ノ前（みやのまえ） 明治三三年頃まで、鎮守神社が西向きに鎮座する。その後、天満宮に合祀して主祭神となし、天満宮は配神と格下げ。それ故に、この年に天満宮の存続を考慮して「神名石」を建立したのか？前の

鎮守神社は太下（おしろ）に南向きに鎮座していた。

②曲田（まがりだ） 一筆でホノギ。二〇坪程度の「く」の字形の土地。神寄川の湾曲する場所。今は道路の拡張や改修で消滅したか？

③古屋敷（ふるやしき） 宅地の開発に伴って、墓石などが多数出土したと聞く。平助兼一族の住所跡か、前田の長者宅の跡地か？前田の長者伝承地も、平一族の跡地の伝承は皆無。

⑦長蓮寺（ちようれんじ） 永田と恵久美に存続する幻の寺名（ホノギ）。広い地域と想像されるが、衰退、消滅、移転、何れも不明。金突、油田が寺の料田だとすると、中世の寺院だが、証明する資料はない。しかし、寺の守護神とした鎮守神社の位置は巽（南東）の方角に推定できる。

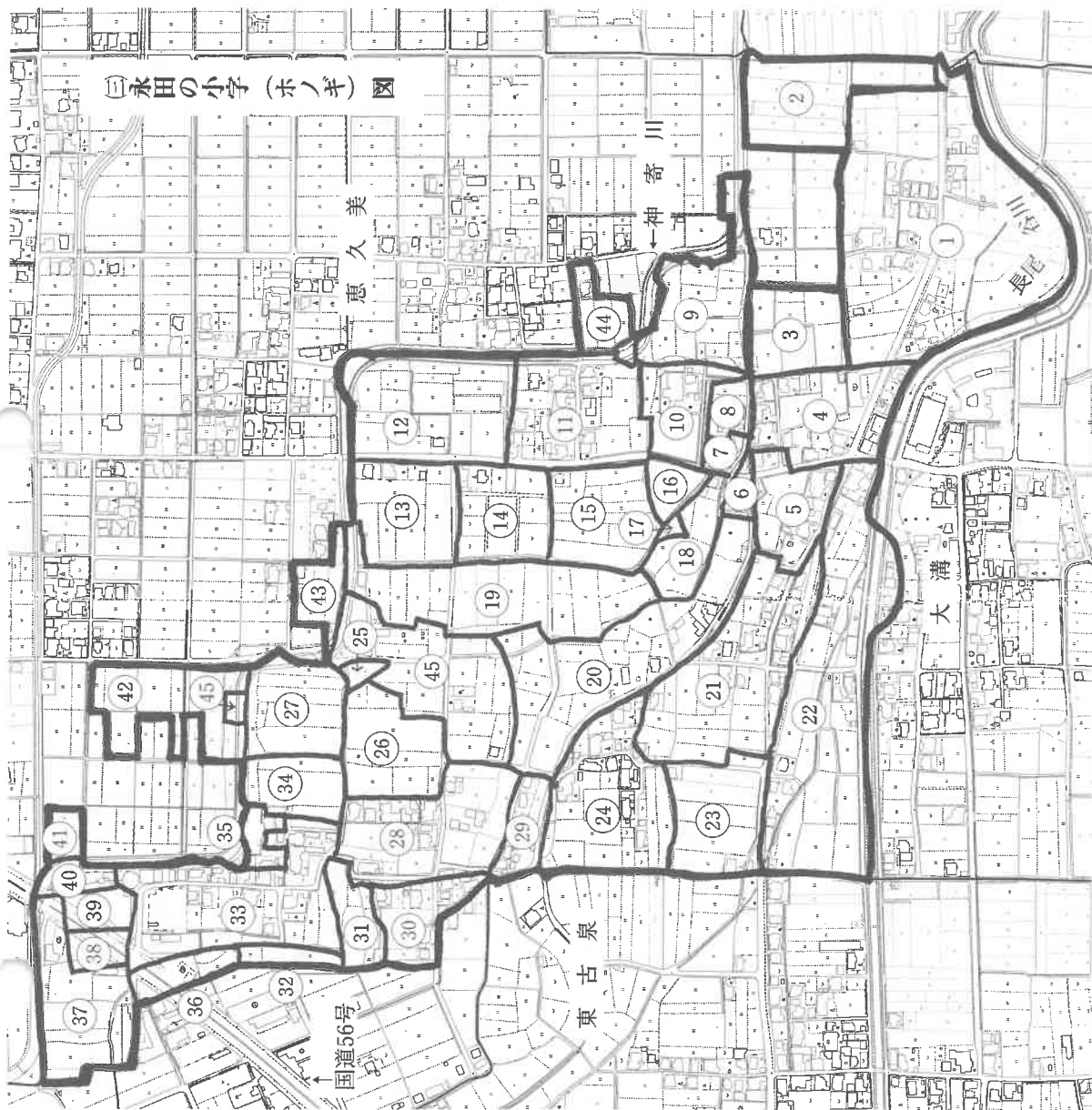
⑧頭王田（ずおうでん） 中世の頭王神社の料田

⑩ぬさき 「ヌサキ」と解すると、ミテグラ・幣を立てて神迎えをしていた場所と考えられるが？

⑪油田（あぶらだ） 中世の社寺の燈明料の料田

⑫金突（かなつき） 中世の寺院の梵鐘の維持管理料の料田
記述した以外の小字（ホノギ）については、いずれも不詳

三 永田の小子 (ホノギ) 図



番号	小字名	呼び名
①	銭塚	せんづか
②	上須丸	かみすまる
③	下須丸	しもすまる
④	須口	ひのくち
⑤	大公家	おおこうげ
⑥	松ノ榎	まつのくぼ
⑦	須口宮ノ浦	ひのくちみやのうら
⑧	須口	ひのくち
⑨	井手ノ浦	いでのうら
⑩	松ノ浦	まつのうら
⑪	七反地	しちたんじ
⑫	局	つぼね
⑬	岸ノ上	きののうら
⑭	横枕	よこまくら
⑮	鯉治分	かじぶ
⑯	蔵ノ元	くらのもと
⑰	古蔵	ふるあん
⑱	宮ノ浦	みやのうら
⑲	鯖田	さびだ
⑳	深田	あかた
㉑	同免	どうめ
㉒	松ノ隣	まつのとなり
㉓	三人百姓	さんにんひやくしやう
㉔	長通	ながどおり
㉕	曲田	まがりだ
㉖	表田	おもてだ
㉗	橋ノ本	はしのもと
㉘	古蔵敷	ふるやしき
㉙	甚か分	じんかうぶん
㉚	朱心分	そうしんぶん
㉛	芋澤川	おこぎがわ
㉜	西ノ榎	にしのかみ
㉝	高見	たかみ
㉞	地蔵元	じざうのもと
㉟	浦木戸	うらきど
㊱	門神西榎	かどのかみにしのくぼ
㊲	草蓮寺	ちやうれんじ
㊳	野王田	ずおうでん
㊴	藤原	たでわら
㊵	スサキ	ぬさき
㊶	生掛田	しやうぶでん
㊷	深ノ上	ふかのうえ
㊸	畑田	あかはだ
㊹	浦徳	ふくとく
㊺	金突	かなつき

九 東古泉の小字（ホノギ）

(一) 大字の起源や由来と「いなや」の由来について

現松前町の北伊予校区の最西部に位置する。古泉という地名の由来は古く『玉生八幡宮御鎮座伝記』に、「神功皇后が朝鮮を征する時、道後の湯に浴してこの地を通り、泉水の湧くのを感ずるところがあり、神に誓い、帛布を浸して遠征の勝敗を占つたところ、白色たちまち変じて紺色の光沢を現したので吉兆を喜び『濃染の里』と名付けた。」とあり、「後訛リテ古泉と云フ」（『愛媛県の地名』）とある。

元禄の初め、筒井の百姓勘五郎が正木（松前）城の東南方にあるよく肥えた水の便のよい土地を見つけ、友と共に、田に稲納屋を建てて出作りした。このような百姓が増えて、田には所々に稲納屋が建てられるようになった。当時の人々はこの土地を「いな屋」と呼ぶようになった。この「いなや」は、元文三（一七三八）年に古泉から独立して、古泉の東にあるので東古泉というようになった（『東古泉村御田地坪水帳』）。

東古泉村は、江戸時代を通じて松山藩領で、慶安元年『伊予国知行高郷村数帳』（一六四八）の伊予郡の項の「松前村」（現、松前町筒井・浜・東古泉・西古泉）にあり、「村高一九一・一石一斗六合、うち田一七五八石八斗七升四合、畠一五二石二斗三升二合」で松山平野屈指の大村をなしている。

西古泉村と分郷した元文三年当時の石高は定かでない。寛政四（一七九二）年には、三七〇石九斗八升三合、四三町九反九畝一步となっており、以後明治までは増加を見ない。

(二) 小字（ホノギ）の由来や伝承

東古泉のホノギは二六ある。その由来は『松前町誌』をもとに古老の方々から聞き取りをした。番号は地図番号である。

① 茂賀利田（もがりだ） 東古泉の西端で、旧重信川（当時の伊予川）の河口付近であつた頃、河藻が生い茂り、舟の行き来の妨げになるので、刈り取られて肥料にも用いたと思われている。藻刈田のあて字と思われる。

② 壺丁地（いっちようじ） 田の長さが長く一町（約一〇〇畝）あつたとか。条里制にちなむ小字と思われる。

③ 志多見田（したみだ） 不詳

④ 四ツ黒（よつぐろ） 瀧姫伝説に由来する。京都の公卿清原朝臣忠武の妹瀧姫が身分違いの愛を遂げようとして罪に問われ、流刑になり侍女と松前の浜に漂着した。瀧姫は、五〇余歳で病没し、侍女三名も相次いで病死した。人々はいたく瀧姫らに同情し、東古泉に四つの塚を造り厚く埋葬した。

東古泉の百姓市兵衛というものが同地の原野を開墾して農を営む傍ら厚く瀧姫を信仰し、安永年間（一七七二～一七八〇）四か所の塚の遺骨を一か所に合葬して「四ツグロ大権現」を建立し崇めた。グロは塚の意。

⑤ 中萱田（なかかやだ） 筒井地区の浜萱田にたいして中萱田でないか。また中洲に茅が生い茂っているところを開墾したのでなかろうか。

⑥ 相の関（あいのせき） 不詳

⑦ 泉ノ向井（いずみのむかい） 水利に係する地名

⑧ 二ノ関（にのせき） 水利に係する地名で一ノ関から始まっている。

⑨才 淵 (さいぶち) 地形からいわれる。中洲で茅のシ
ゲミが深く湿地であった。

⑩穴 田 (あなだ) 地形や地質からいわれる。耕作地が
石原で水持ちが悪かった。水を入れても穴が開いている
ように抜けてしまったところからいわれる。

⑪一ノ関 (いちのせき) 水利の関係で一番堰であった。
一ノ関は、浜村の町人請負の形で開かれた新田で、浜村
地として明治まで飛び地となっていた。明治二二(一八
八九)年の町村制施行で大字東古泉に編入され、東古泉
分であった早崎は大字筒井に編入された。

⑫浜 田 (はまだ) 浜村(松前町)の町人が開墾した地
域である。

⑬五反地 (ごたんじ) 五反地は、土地が高く横を流れる
二つの川から水を引かず、大溝の高い小井手から樋渡
(懸樋)で受けていた。条里制の地名といわれている。
日照りが続くと、すぐ水の涸れる地区であった。その
ため各人が田ごとに井戸を掘り、はね釣瓶で汲んでいた。
大正に入り共同で溜池を掘り、水車を使うようになり、
少しずつよくなった。溜池も度々涸れると、なんとか汲
む量が出るようになり、昭和の初めころから個人の井戸
は、逐次埋められた。ところが昭和九年の大干魃で、五
反地の水車用の溜池の中の一か所を選び、深井戸に掘り
下げ、豊かな良質の水源を掘り当てた。

⑭浮 橋 (うきはし) 舟か丸太をつないでその上に板を
置き、河水の増減に応じて上下する橋に由来した地名
⑮神 取 (かんどり) 浮橋の隣。神取でなく梶取で舟の
舵取り、すなわち船頭が住む所ともいわれている。
⑯上 又 (うわまた) 不詳

⑰極 楽 (ごくらく) 東古泉で一番耕作しやすく水利の
便、水持ちなどすこぶる上田であり、面積も広く(一筆
が二反程度)取得できた由来がある。

⑱恵 電 (えがま) 不詳

⑲吸 物 (すいもの) 不詳

⑳高 桶 (たかひ) 水利に関係ある地名

㉑源 助 分 (げんすけぶ) 稲納屋に早くから出作りした者
の名前が地名となっている。

㉒枝 松 (えだまつ) 不詳

㉓大地窪 (おじのくぼ) 地形に由来されるものでこの地
域は大きい湿地であった。(窪、久保は湿地を意味する)

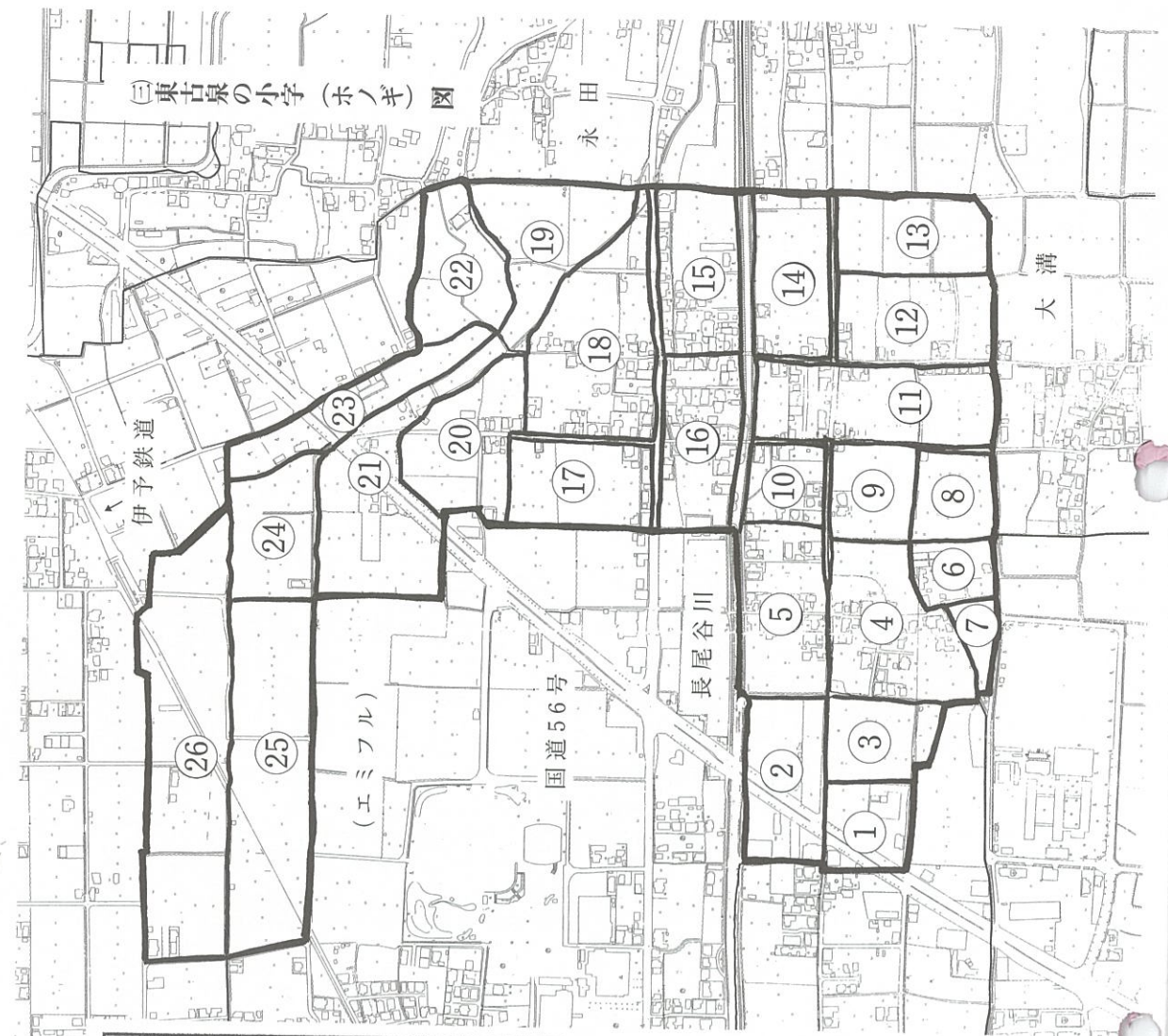
㉔文五郎分 (ぶんごろうぶ) 稲納屋に早くから出作した者
の名前が小字の地名となっている。

㉕登り内 (のぼりうち) 以前は轆内という。端午の節句
に、この地区では内轆を立て、外轆を立てない。これは、
正木城主加藤嘉明が、関ヶ原の合戦に出陣した留守を中
国の毛利方が攻めた時の故事によるものである。留守を
守っていた佃十成はわずかの兵で交戦することの不利を
考え、武器を地中に埋め、城門を開き、城の東方轆内に
旗、差物を倒し、伏兵の陣を敷き無人のごとく見せた。
敵は松前の小勢を侮り、三津浦(松山市三津)に陣を敷
いた。十成は夜討ちをもつて毛利勢を破った(刈谷の戦
い)。この時以来この地を轆内(現在の登り内)といわれ
る。

㉖東 浦 (ひがしうら) 不詳

なお東古泉の小字(ホノギ)の順が他地区と違い、西
(下)より東(上)の順になっている。

(二)東古泉の小字(ホノギ) 図



番号	小 字 名	呼 び 名
1	茂賀利田	もがりだ
2	巷丁地	いっちようじ
3	志多見田	したみだ
4	四ツ黒	よつぐろ
5	中堂田	なかやだ
6	相ノ関	あいのせき
7	泉の向井	いずみのむかい
8	二ノ関	にのせき
9	才淵	さいぶち
10	穴 田	あなだ
11	一 関	いちのせき
12	濱 田	はまだ
13	五反地	ごたんじ
14	浮 橋	うけはし
15	神 取	かんどり
16	上 又	うわまた
17	極 楽	ごくらく
18	恵 電	えがま
19	吸 物	すいもの
20	高 桶	たかひ
21	源助分	げんすけぶ
22	枝 松	えだまつ
23	大地窪	おじのくぼ
24	文五郎分	ぶんごろうぶ
25	登り内	のぼりうち
26	東 浦	ひがしうら

『北伊予の伝承 第11集』

平成24年3月 発行

発 行 松前町東公民館
〒791-3161
愛媛県伊予郡松前町神崎210番地
TEL 089-984-1159
責任者 高 石 勤

『北伊予の伝承 第11集』編集委員

委員長	神 崎	高 石	勤
副委員長	出 作	水 口	憲 三
副委員長	鶴 吉	大 政	邦 和
副委員長	出 作	小 松	ヒトミ
副委員長	大 溝	田 中	安 男
委 員	徳 丸	木 下	春 雄
委 員	徳 丸	田 中	祥 景
委 員	中川原	藤 田	常 和
委 員	中川原	大 政	博
委 員	神 崎	池 内	和 男
委 員	鶴 吉	相 原	隆 志
委 員	横 田	徳 本	直 之
委 員	永 田	淺 井	勝 彦
委 員	東古泉	稲 垣	昂 規
委 員	東古泉	萩 野	一 二

(事務局) 東公民館 館長 得 能 廣 明
主事 上 田 彩 乃



この冊子は、資源保護と環境に
配慮して大豆油インキ、再生紙で
作成しています。